

岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第35集

清水尻経塚発掘調査報告書

— 一関東第二工業団地拡張整備事業に伴う発掘調査 —

令和5年1月

— 一 関 市

— 一関市教育委員会

序

一関市は、四季折々に多彩な表情を表す豊かな自然に恵まれています。栗駒山から磐井川が東流し、市内中心部を経て北上川に注いでいます。縄文時代から人々の生活が確認でき、現在に至るまでの時代の多様な埋蔵文化財包蔵地が多く存在しています。

このたび、一関東第二工業団地拡張整備工事を実施するにあたり、市教育委員会により埋蔵文化財に関する一連の調査を実施しました。その過程で、これまで埋蔵文化財包蔵地と認識していなかった場所に、12世紀頃のものと思われる経塚を2基確認したため、これらを包蔵地「清水尻経塚」としました。そして、この経塚の取扱いについて検討した結果、整備工事の範囲を変更して、経塚2基のうちの1基は現状保存し、もう1基は記録保存調査を実施することとしました。

これらの経緯も含め、発掘調査の成果を本報告書にまとめました。本報告書により、調査の成果を広く公開し、市民並びに全国の方々にも当市の文化財を知って頂き、関心が高まることを期待します。また、地域のルーツを紐解いていくことが、より良い地域づくりの一助になれば望外の喜びです。

結びに、調査に際しては地権者、地域住民の皆さまをはじめ多くの方々のご協力を頂きました。衷心より感謝を申し上げます。

令和5年3月

一関市

市長 佐藤善仁

一関市教育委員会

教育長 小菅正晴

例 言

1. 本書は、岩手県一関市教育委員会が令和4年度に実施した清水尻経塚発掘調査の報告書である。
2. 調査は一関東第二工業団地拡張整備事業に伴う発掘調査で、調査面積は304㎡である。
3. 発掘調査から報告書刊行までの一連の業務は、一関市商工労働部工業労政課から業務委託された株式会社一測設計が、一関市教育委員会文化財課の管理のもと担当している。
4. 調査対象地は、清水尻経塚(一関市滝沢字清水尻 60-1、89-1、90)である。
5. 調査主体は、一関市教育委員会 教育長 小菅正晴であり、本発掘調査は一関市教育委員会文化財課の管理のもと、株式会社一測設計が担当した。調査期間は以下のとおりである。

試掘調査	令和4年3月28日～令和4年4月7日 (一関市教育委員会文化財課)
本発掘調査	令和4年8月30日～令和4年10月24日 (一関市教育委員会文化財課・支援 株式会社一測設計)
整理作業、報告書作成	令和4年9月25日～令和5年1月31日
6. 調査体制は以下のとおりである。

調査主体	一関市教育委員会
調査担当者	一関市教育委員会文化財課 主任学芸員 菅原孝明
業務管理者	株式会社一測設計 安達尊伸
調査員	株式会社一測設計 高橋広太
測量員	株式会社一測設計 渋谷清勝 高橋和幸
7. 遺構実測図に示した方位は真北を示す。また、標高はT.P(東京湾平均海面)を使用した。
8. 遺構の規模はm、礫の重さはgを単位とした。遺構に関する記述で()は残存値を示す。
9. 土層及び遺物の色相は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖 30版 2008年度版』(日本色研事業株式会社)の表記による。また、しまり並びに粘性については、強い・あり・ややあり・弱い・なしの5段階、含有物については多量・中量・少量・微量・ごく微量の5段階に分けて表記した。
10. 執筆は第2章第1節を菅原孝明(一関市教育委員会文化財課)、第3章を高橋、榎引、赤城、そのほかを高橋が行った。編集は菅原の監修のもと高橋が行った。
11. 本報告書では、遺構の種別ごとに記号を用いて一連番号を付した。

経塚	= S Z	溝	= S D
----	-------	---	-------
12. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、次の諸氏、諸機関から有益なご協力とご教示をいただいた。記して感謝いたします。(五十音順、敬称略)

佐々木繁喜	八重樫忠郎	山川純一
-------	-------	------

岩手県立図書館
科学研究費基盤研究(B)「平泉仏教文化の諸相とその社会的基盤に関する資料学的研究(研究代表七海雅人東北学院大学教授)」平泉関連遺跡発掘調査団
13. 調査及び整理作業参加者
赤城佑弥 伊藤駿 榎引理沙 金野正克 佐藤伯 菅原豊 千葉修 千葉一志
西間木咲希 橋本昭一 松平勝男

目 次

序	1
例言	3
目次	4
1 位置と環境	5
(1)一関市の位置と環境	5
(2)清水尻経塚の位置と環境	5
(3)歴史的環境	7
2 調査に至る経緯	10
3 清水尻経塚の調査	11
(1)調査の方法	11
(2)調査の経過	11
(3)基本層序	12
(4)確認した遺構と遺物	14
4 総括	26
(1)清水尻経塚S Z 1、S Z 2について	26
(2)清水尻経塚周辺の経塚遺跡	26
1.一関市内の経塚遺跡	26
2.岩手県内の経塚遺跡	31
(3)清水尻経塚S Z 1、S Z 2の構築時期	35
写真図版	36

1 位置と環境

(1) 一関市の位置と環境

一関市は岩手県の南端に位置する人口 110,019 人(2022 年 11 月 1 日現在)の都市である。

平成 17 年(2005) 9 月 20 日に一関市、花泉町、大東町、千厩町、東山町、室根村、川崎村の 7 市町村が合併、さらに平成 23 年(2011) 9 月 26 日藤沢町と合併した。東西に約 63 km、南北に約 46 kmの広がりを見せる市の総面積は 1,256.42 km²である。

中央部を北上川が南流する市域は、西側に奥羽山脈、東側に北上山地がある。著名な記念物は、コニーデ型二重火山である栗駒山(標高 1,626.5 m)を中心とする火山性山岳風景地の「栗駒国定公園」(昭和 43 年(1968)国指定)や、北上川水系磐井川流域の史跡「骨寺村荘園遺跡」(平成 17 年(2005)国指定)及び重要文化的景観「一関本寺の農村景観」(平成 18 年(2006)国選定)、下流域には変化に富んだ溪谷景観をなす名勝及び天然記念物「巖美溪」(昭和 2 年(1927)国指定)がある。東側には同じ北上川水系の砂鉄川流域に、名勝「狛鼻溪」(大正 14 年(1925)国指定)がある。室根山(標高 895.5 m)から黄金山(481.6 m)の南に続く山稜は分水嶺となり、東側は気仙沼湾に注ぐ大川、また、気仙沼市本吉町小泉の赤崎海岸で太平洋に注ぐ津谷川がある。

また市内の著名な文化財には、重要文化財「鉄五輪塔地輪」(花泉町涌津)(昭和 55 年(1980)国指定)、重要文化財「木造観音菩薩坐像」(大東町渋民)(平成 30 年(2018)国指定)、重要無形民俗文化財「室根神社祭のマツリバ行事」(昭和 60 年(1985)国指定)がある。

(岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第 31 集に一部加筆、転載)

(2) 清水尻経塚の位置と環境

調査地である清水尻経塚は J R 大船渡線真滝駅から南西に約 6.5km、標高約 97 mの地である。本遺跡は、一関市内西半部、西縁を山王山と小衣森を結ぶ線から東縁を真滝・弥栄地区までをおおよその範囲とする磐井丘陵上東縁部に位置する。磐井丘陵は西縁部の標高が約 500 m～400 mで東に向かって低くなり、東縁部では標高約 100 mとなる。本遺跡の立地する丘陵東縁部に沿うように北上水系の滝沢川が北流し、滝沢川の浸食によって形成された谷底平野から遺跡までの比高差は約 27 mである。

磐井丘陵及びその周辺の地質は、先第三紀系基盤岩の上位に中新統、鮮新統、更新統に属する真滝層、滝沢層(中山層)などが墨重する。磐井丘陵は頂面の標高や地質、地質構造により、東北本線の西側あたりを境にする一関一石越撓曲線と呼ばれる撓曲構造によって東西に二分され、一関一石越撓曲線の西方では中新統の下黒沢層及び巖美層が丘陵の基部に露出し、東方では基部に鮮新統の油島層や金沢層、最上部には更新統の滝沢層(中山層)が分布する。滝沢層(中山層)の分布範囲はほぼ一関一石越撓曲線の東側に限定される(楮原京子・田代佑徳ほか 2016)。

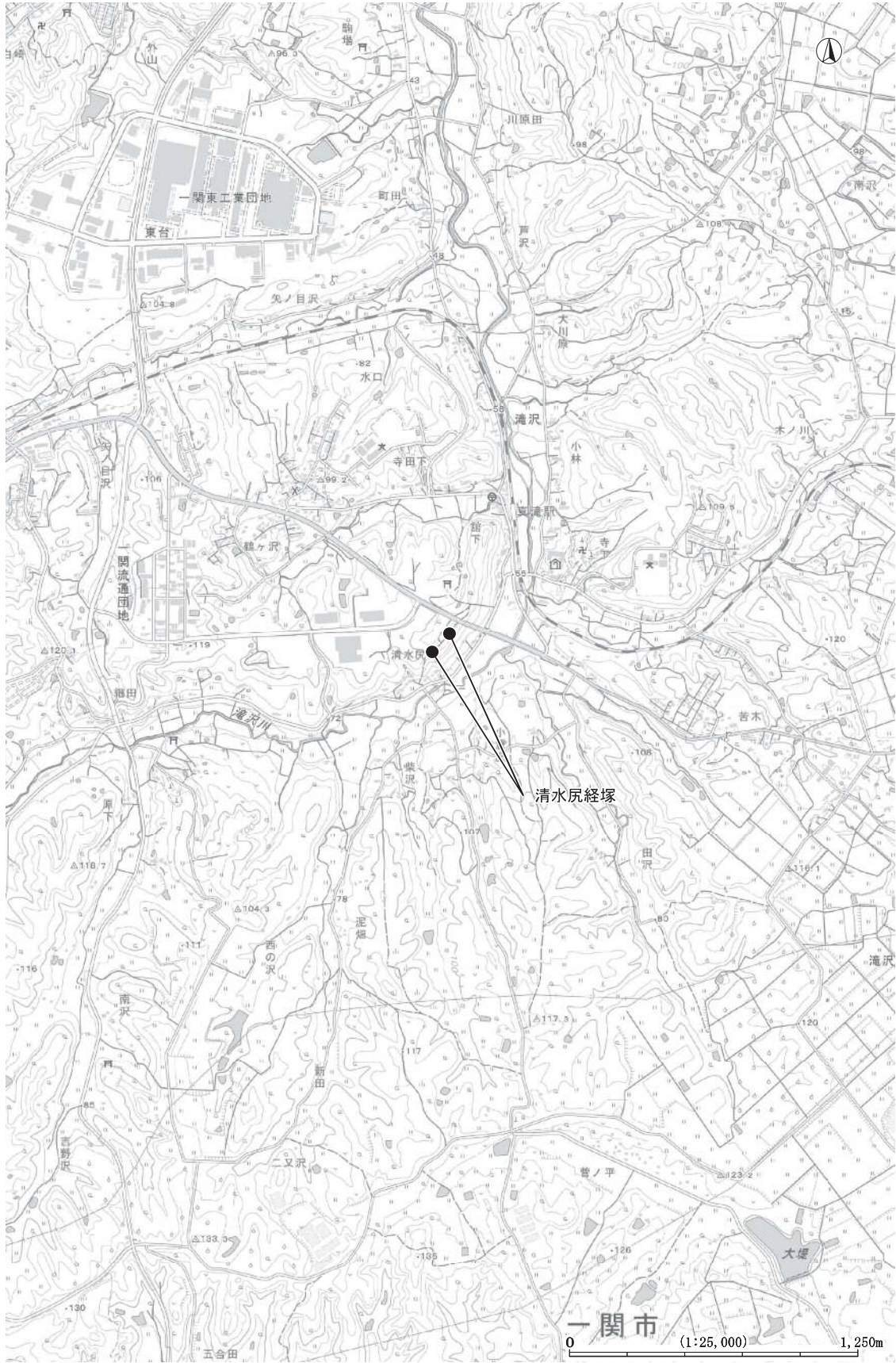


図1 清水尻経塚位置図

(3) 歴史的環境

一関市内では埋蔵文化財包蔵地は 932 遺跡が周知化されている（『いわて遺跡地図』<https://maizobunkazai-web.pref.iwate.jp/>）。清水尻経塚周辺の遺跡を見ると、旧石器時代の散布地 1 遺跡、縄文時代の散布地が 3 遺跡、平安時代の散布地が 1 遺跡、中世末の城館跡が 2 遺跡、近世の塚が 1 遺跡ある（図 2、表 1）。中世末の城館のうち滝沢城（田中館）は本遺跡の尾根筋上、北北東方向約 0.4 km に位置する。また、本遺跡から北へ約 0.2 km には、旧真滝村の村社である滝神社が位置する。

『復刻 眞瀧村誌』（眞瀧村誌復刻刊行委員会 2003）によると、本遺跡の周辺にはいくつかの宗教的施設の存在が記されている。

国道 284 号線真滝バイパスを挟んで反対側に位置する瀧神社は真滝村の村社とされており、その記述は以下のとおりである。

「本社は、延暦二十年、征夷大將軍・坂上田村麿東下蝦夷平定の時、特に磐井郡司阿部黒人將軍の命に依り、高丸の餘黨追討のため、荒滝（今の滝沢）に来り、俄に賊巢を襲ひ討ちて、九人を擒にし、殘徒を懐ち居民を安ず。此の時桂ヶ峯に白山大神並に熊野大神を祀りて鎮守となし、更に熊野大神を延寿ヶ原（長谷場）、鷹之巢等に祀り、以て熊野二社とす。而して、桂山蓮華坊を立て別当となし、祭祀を司らせ給ふ。

寛治二年に至り、鷹巢右近、延寿ヶ原・鷹之巢等に在し、熊野社を桂峯に奉遷し、熊野に白山の二神を合祭す。

元禄十二年、神殿禿破甚しきを以て、村民一致以て再興し、社殿を造営し、更に滝神社を合祭し、熊野・白山・滝神社と称し奉る。

明治三年「神社御書上」を見るに、『熊野社、白山社、瀧明神宮、四間四面 社宇一町四方 御林の内右三社相殿勸請に御座候。祭日三月二十八日、九月九日。一ヶ年二度』とあり。（『復刻 眞瀧村誌』眞瀧村誌復刻刊行委員会 2003）。

さらに、

「月山社 滝沢桂峯 祭日三月九日 祭神 月読命 伝云、往古より茲に小宮ありしが、正徳の頃より靈驗著しく、附近にある『おみだらせ』は、之れを飲めば病癒し、眼につくれば眼病治しとて、流行神となり、遠近より参拝者多く、ために一関方面より商人入りこみたりといふ。その後、乞食泊りてこの『おみだらせ』をけがせしより漸く廢し、今其の當時をしたふのみ。」（『復刻 眞瀧村誌』眞瀧村誌復刻刊行委員会 2003）。

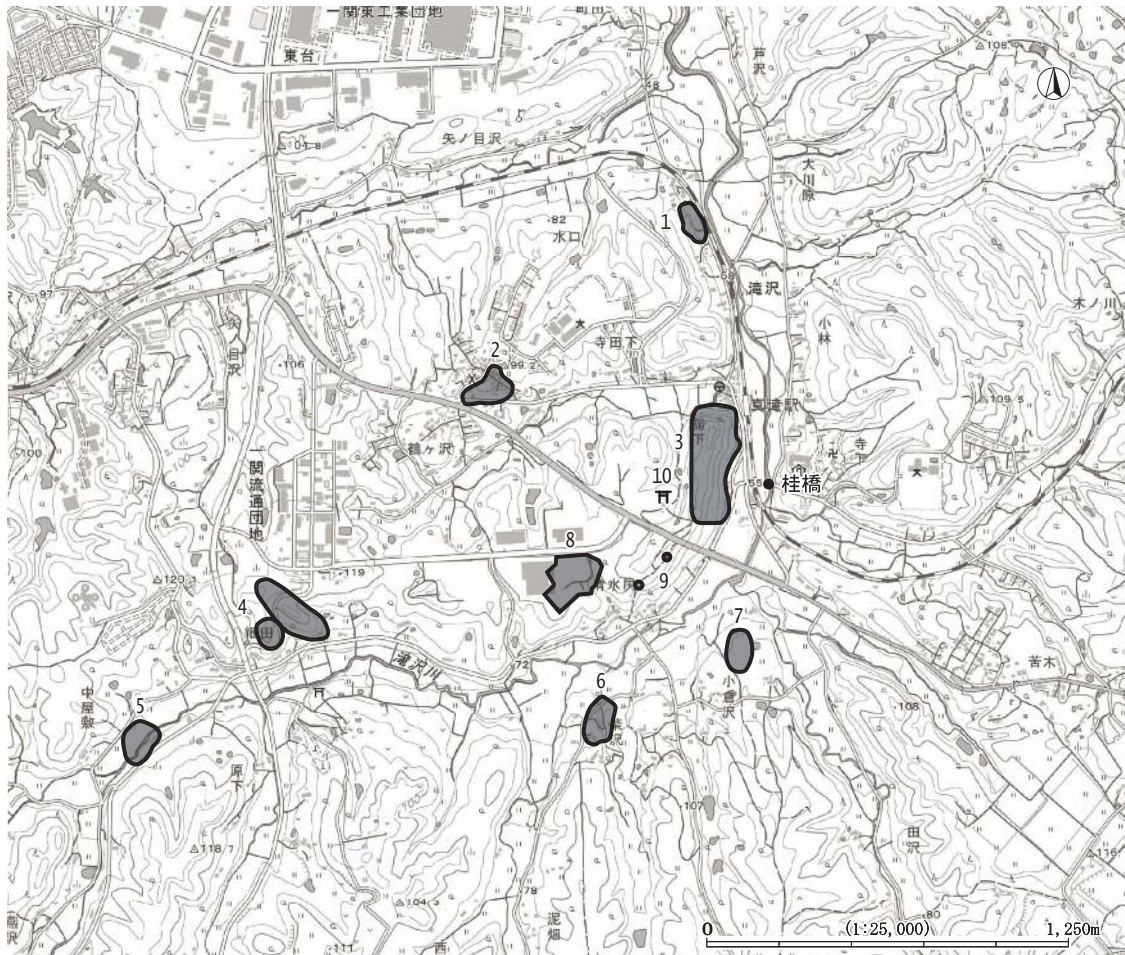
との記述も見ることができる。

上記と合わせて、一関藩士である佐藤勇右衛門が文化 15 年（1818）に作成した『西岩井滝沢村絵図』（図 3）によると、現在の清水尻経塚周辺に「水神」、「月山堂」、「クマノ堂」、神社などが描かれている。

『西岩井滝沢村絵図』と『復刻 眞瀧村誌』との記述を対応させるならば、「水神」は「おみだらせ」に、「月山堂」は「月山社」に、「クマノ堂」と神社は「滝神社」に対応すると考えられる。『復刻 眞瀧村誌』の記述をもとにするならば、「月山社」は「滝沢桂峯」に位置しており、また、「此の時桂ヶ峯に白山大神並に熊野大神を祀りて鎮守となし、更に熊野大神を寿ヶ原（長谷場）、鷹之巢等に祀り、以て熊野二社とす。…寛治二年に至り、鷹巢右近、延寿ヶ原・鷹之巢等に在し、熊野社を桂峯に奉遷し、熊野に白山の二神を合祭す。」（眞瀧村誌復刻刊行委員会 2003、…は筆者加筆）とあることから、『西岩井滝沢村絵図』から考えて付近一帯が「桂峯」と呼ばれていたと思われる。また、初期に白山大神と熊野大神とを祀った場所が「柱ヶ峯＝桂峯」であることから、「桂峯」一帯は宗教的施設が成立する何らかの要因があったものと考えられる。現在においても「水神」＝「おみだらせ」、「クマノ堂」、神

社＝「滝神社」はほぼ絵図どおりの場所に位置していることから、清水尻経塚もまた、その位置から考えて「桂峯」と呼ばれる一帯に位置していたと考えられる。

清水尻経塚から北東に約0.5 kmの位置には、滝沢川を渡る橋(現、桂橋)があり、『西岩井滝沢村絵図』にもほぼ同じ位置に橋が描かれている。この橋を渡り気仙沼方面へと抜ける街道が伸びており、往時には交通の要衝であった。奥州藤原氏は交通の要衝に多く経塚を築いたとされており(八重樫2002)、清水尻経塚の立地もまたそのような場所であると考えられる。

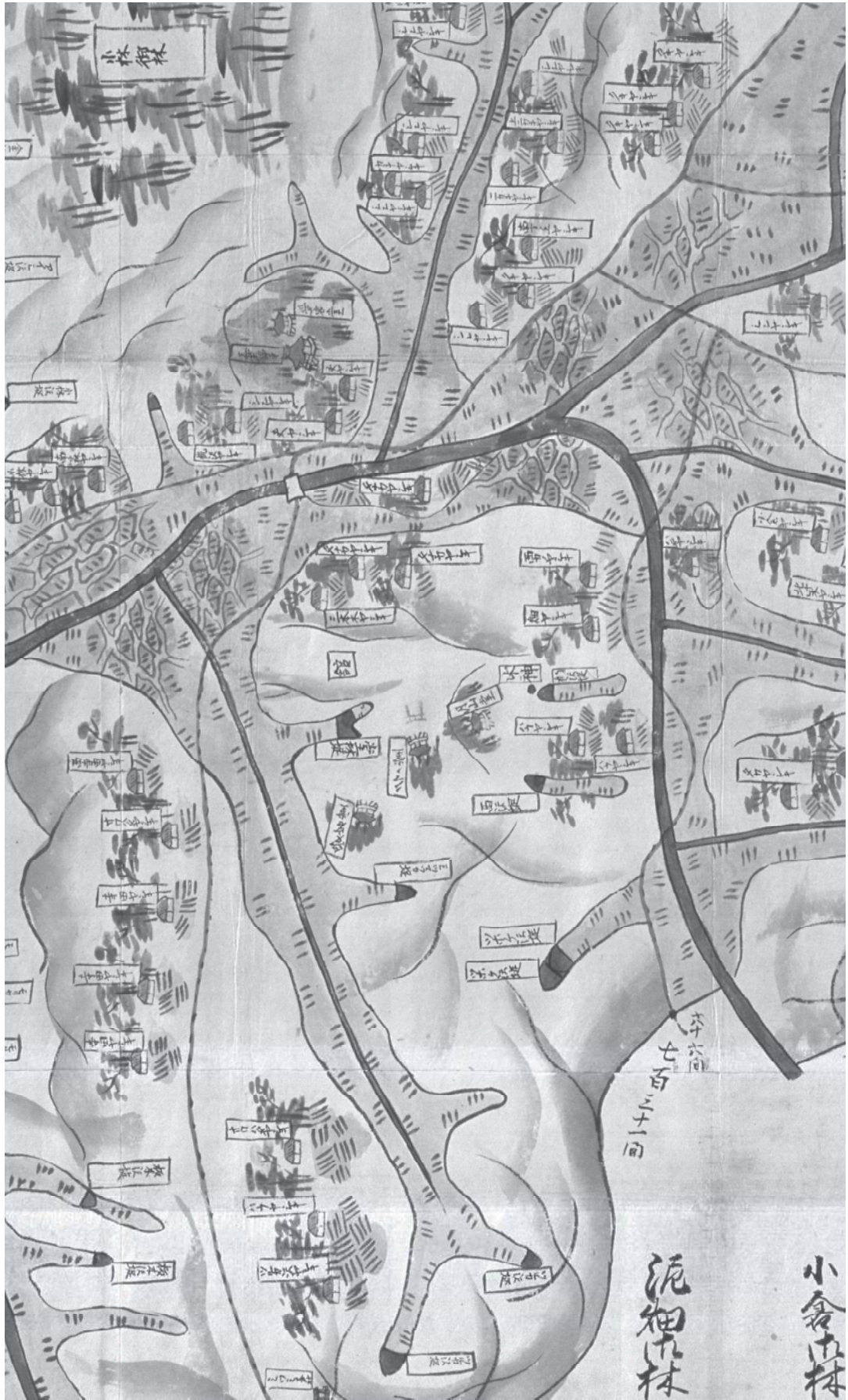


国土地理院ウェブサイト地理院タイル (<https://maps.gsi.go.jp/>) 及びいわて遺跡地図 (<https://maizobunkazai-web.pref.iwate.jp/map/>) を加工して作成

図2 清水尻経塚周辺の遺跡及び神社

番号	遺跡名	時代	遺跡種別	出土遺構・遺物
1	水口	旧石器	散布地	尖頭器
2	滝沢水口	縄文	散布地	縄文土器
3	滝沢城 (田中館)	中世末	城館跡	平場・土塁・空堀、鉄製品
4	牧沢城 (内野目館)	中世末	城館跡	直線連郭・土塁・空堀
5	中屋敷	縄文	散布地	石鏃
6	柴沢	平安	散布地	須恵器
7	キリシタン塚	近世	その他の遺跡 (塚)	塚9基
8	鶴ヶ沢	縄文	散布地	溝、石鏃
9	清水尻経塚	中世	その他の遺跡 (経塚)	
10	滝神社			

表1 清水尻経塚周辺の遺跡及び神社



岩手県立図書館蔵老加工、転載

図3 西岩井滝沢村絵図

2 調査に至る経緯

一関市商工労働部工業労政課では、一関東第二工業団地拡張整備事業を令和4年度から開始するため、令和3年11月2日付け工第08002号文書により、分布調査依頼書を一関市教育委員会文化財課へ提出した。事業地は、一関市滝沢字清水尻地内で、対象面積は約49,500㎡である。これを受けて、文化財課では12月20日、21日にわたって分布調査を実施した。その結果、遺跡の可能性のある地点を複数確認し、12月28日付け教文第09012号文書により試掘調査が必要であることを回答した。

続いて、工業労政課から令和4年2月15日付け工第11008号文書により、試掘調査依頼書が提出された。文化財課では、これを受けて3月28日～31日、4月4日～7日にかけて試掘調査を実施した。その結果、掘削を実施した場所については、遺構・遺物は確認されなかった。ただし、分布調査で確認していた土盛り2基は塚であること、葺石が表面に集められていることから経塚の可能性が高いことを確認したため、4月18日付け教文第01013号文書により、塚の掘削には事前の発掘調査が必要であることを回答した。

このことから、工業労政課から6月23日付け文書により発掘の通知が提出され、文化財課では6月24日付け教文第03029号文書により事前の発掘調査を勧告した。一関東第二工業団地拡張整備事業では、事業対象地の造成工事を11月から実施する計画であったことから、それまでに発掘調査（野外調査）を終わらせる必要があった。文化財課では、既に骨寺村荘園遺跡や西光寺裏遺跡の発掘調査を実施中または実施予定であったことから、株式会社一測設計に野外調査を依頼することとした。7月29日には関係者の協議を行い、工程の調整を行い、8月30日から野外調査を開始した。

なお、試掘調査終了後に包蔵地の新規発見の手続きを取り、5月6日付け教生第195号文書により清水尻経塚（遺跡コード0E07－2109）として岩手県遺跡台帳に登録された。また調整の過程で、塚2基のうち1基は現地保存するため造成範囲の変更が行われた。

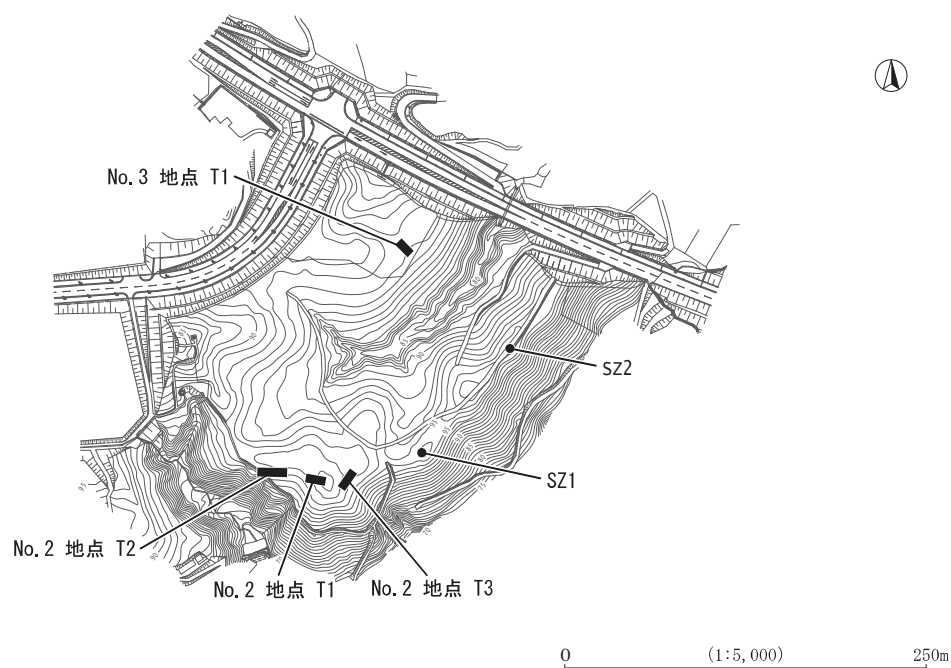


図4 試掘確認調査トレンチ配置図

3 清水尻経塚の調査

(1) 調査の方法

世界測地系に基づき、本調査地点を網羅するグリッドを設定した。グリッドの基点は北西端に定めた。その座標値は、 $X = 121650.000$ ・ $Y = 29510.000$ である。グリッドは $10\text{ m} \times 10\text{ m}$ を大グリッド、 $2\text{ m} \times 2\text{ m}$ を小グリッドと定めた。大グリッドの番号は東西軸に大文字のアルファベット、南北軸にローマ数字を順に付し、北西端をA I、南東端をL X IIIとした。また小グリッドの番号は東西軸に小文字のアルファベット a ~ e、南北軸にアラビア数字 1 ~ 5 を順に付し、「A I - a 1 グリッド」のように表記した。

S Z 1 は現状保存目的のための測量調査、S Z 2 は記録保存のための発掘調査を実施した。

掘削はすべて人力により行い、遺構番号は検出段階でその種別ごとに任意で 1 から順に付した。

葺石は S Z 2 構築土層上及び土層中のものは 1 点ずつ測量を行い取り上げた。そのほかの葺石はグリッド番号を記録し、一括取り上げとした。

遺構実測図はトータルステーションシステムによる三次元計測、U A V による空中写真測量、地上撮影による写真実測を併用して作図した。

写真撮影はフルサイズのデジタル一眼レフカメラを用いた。

利用した測量基準杭の成果は以下のとおりである。

基準点 T A . 6 $X = -121663.111$ $Y = 29620.088$ $H = 95.679$

基準点 T A . 7 $X = -121683.974$ $Y = 29606.537$ $H = 97.081$

基準点 T A . 8 $X = -121702.600$ $Y = 29589.204$ $H = 97.878$

基準点 T A . 9 $X = -121721.566$ $Y = 29575.008$ $H = 97.651$

基準点 T A . 10 $X = -121739.067$ $Y = 29558.806$ $H = 95.902$

(2) 調査の経過

現地発掘調査は、令和 4 年 8 月 30 日に着手した。始めに S Z 2 の現況レーザー測量を開始し、9 月 2 日に完了した。それと並行して S Z 1 の表面清掃を行った。9 月 5 日から S Z 2 の表土掘削を開始し、同時に基本層序把握のため調査区外南側 (I V - e 1 グリッド付近) に T P 1 を設定した。T P 1 の観察結果により、S Z 2 中央部を損壊して北方向に延びる林道造成にあたって大規模な盛土が行われていること、その盛土が一部調査区に及ぶことが判明した。9 月 15 日から S Z 2 の半截掘削を開始した。半截掘削にあたっては、中央部にベルトを残した上で林道の両端に幅約 0.4 m のトレンチを設定し地山層まで掘削を行うことで経塚築造工程の把握に努めた。9 月 30 日には U A V による S Z 1 の航空写真測量を行い、S Z 1 の調査を完了した。

10 月 3 日からは S D 1 及び S D 2 の掘削を開始し、S Z 2 の半截掘削、S D 1 及び S D 2 の掘削が完了した 10 月 19 日に U A V による航空写真撮影並びに航空写真測量を行った。この間の 10 月 17 日には現地説明会が予定されていたが、雨天により中止となった。その後、10 月 21 日までに S Z 2 の構築土掘削を行い、10 月 24 日に一関市商工労働部工業労政課、一関市教育委員会文化財課、株式会社一測設計の三者で現地調査終了を確認した。

なお、取り上げた葺石は総重量を計測し、遺物番号を付した札を同封した後土嚢袋に収納して S Z 1 付近に保存した。

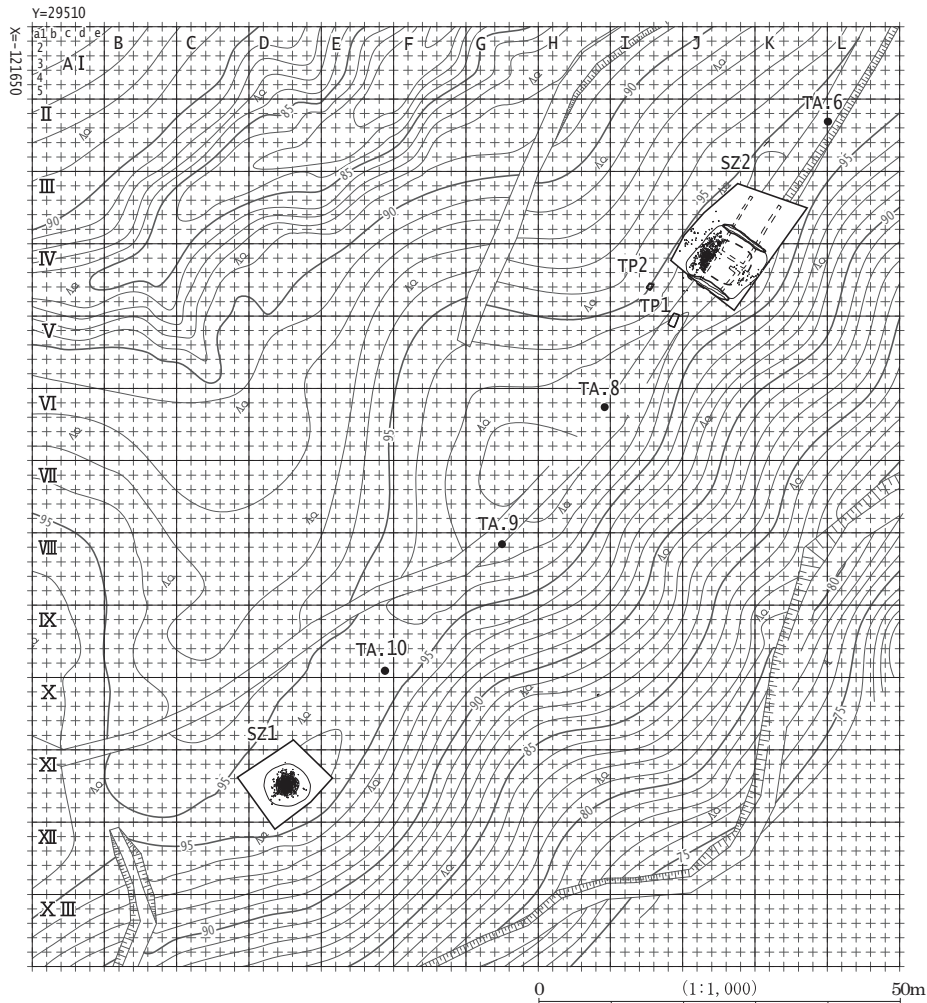


図5 全体図及びグリッド設定図

整理作業及び報告書作成は9月25日より株式会社一測設計郡山支店でいった。現地調査記録の整理、実測図などのトレースを進め、報告書作成に向けた作業を行い、令和5年1月31日に本報告書刊行の運びとなった。

(3)基本層序

調査前の地表は標高約97mで丘陵の尾根上であった。基本層序は色調と土性からI～VIII層に大別し、さらにI層はI a・b層に分け細別9層とした。また、I～VIII層は本調査において独自に番号を付した。調査着手時にはすでに人為的に林道が造成されており調査区の大部分が削平された状態であったため、調査区外のIV-e1グリッド付近にTP1、IV-c3グリッド付近にTP2を設定して土層を記録した。しかしながらTP1もまた大きく林道造成時の攪乱を受けており、現表土下に林道造成時のものと思われる盛土が0.3m～0.5m堆積した状態であった。またTP2は尾根の斜面にあたるため、堆積の様相や層厚などの点において調査区である尾根上とは異なる可能性が高いが、TP1・TP2の土層を参考として調査区の基本層序の把握に努めた。

I層(表土)は層厚約0.1mである。I a層はしまりのない暗褐色シルトで現表土である。I b層は層厚約0.1mの灰黄色褐色シルトで、林道造成時の旧表土である。林道造成による盛土直下のみ確認でき、林道周辺にのみ分布する。

II層は層厚0.1 m以上の粘土質黄褐色シルトで、試掘調査において確認されたが、本調査区及びTP1・TP2においては確認できなかった。これが斜面による堆積土の違いによるものか、削平によるものかは判断できなかった。

III層は黄褐色シルトで層厚約0.2 mである。

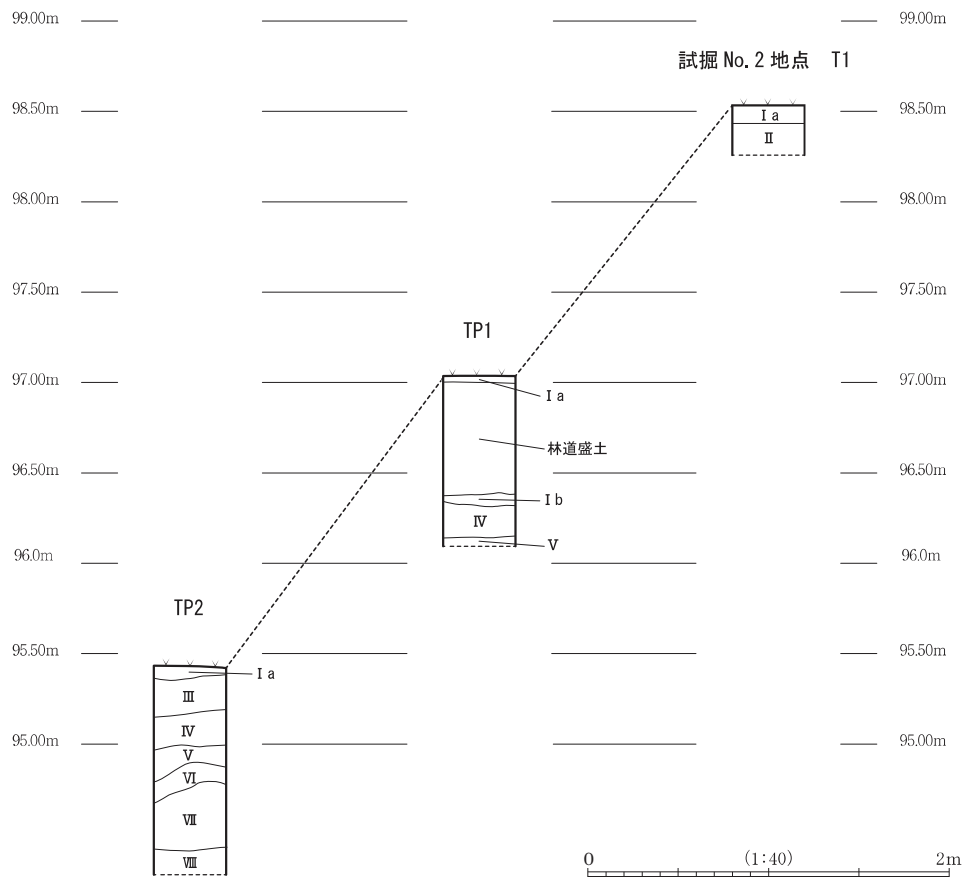
IV層は黄褐色シルトで層厚約0.2 mであり、直径30 mmまでの礫をごく微量含む。この層以下に含まれる主な礫は風化した凝灰岩である。

V層はにぶい黄褐色シルトで層厚は約0.15 mである。IV層と同様の礫をより多く含む。

VI層はにぶい黄褐色シルトで層厚は約0.15 mである。IV層に似るが、砂質土を含む。

VII層はにぶい褐色礫層で、層厚は約0.4 mである。風化した凝灰岩を主体とした礫層である。S Z 2の構築土層直下に確認した。

VIII層はにぶい黄褐色砂層で層厚は0.15 m以上である。礫層及び砂層からなる更新統の滝沢層（中山層）である。



I a	暗褐色シルト (10YR3/4)	粘性なし、しまりなし。現表土。層厚約0.1 m。
I b	灰黄褐色シルト (10YR5/2)	粘性なし、しまり強い。旧表土。
II	黄褐色シルト (10YR5/6)	粘性強い、しまり強い。粘土質。層厚約0.2 m。
III	黄褐色シルト (10YR5/6)	粘性あり、しまりあり。
IV	黄褐色シルト (10YR5/6)	粘性ややあり、しまり強い。φ 1 ~ 30 mmの礫ごく微量含む。
V	にぶい黄褐色シルト (10YR5/4)	粘性ややあり、しまり強い。φ 1 ~ 30 mmの礫中量含む。
VI	にぶい黄褐色シルト (10YR5/4)	粘性弱い、しまり強い。砂質。φ 1 ~ 30 mmの礫中量含む。
VII	にぶい褐色礫 (7.5YR5/4)	粘性なし、しまり強い。φ 1 ~ 50 mmの礫主体。
VIII	にぶい黄褐色砂 (10YR5/3)	粘性なし、しまり強い。φ 1 ~ 20 mmの礫中量含む。更新統滝沢層 (中山層)。

第6図 基本層序

(4) 確認した遺構と遺物

調査区はDⅩIグリッドを中心とするSZ1とJⅣグリッドを中心とするSZ2との2か所である。SZ1は現状保存のための測量調査、SZ2は記録保存のための発掘調査を実施した。確認した遺構は経塚2基、溝2条である。遺物は出土しなかった。

経塚SZ1 (図7・9・10、写真図版4-1、5-2~4)

DⅩ-a1~e4グリッドに位置する。丘陵の尾根上に位置する経塚であり、平面形は円形、断面形は台形である。規模は下底部で直径6.42m、下底部からの高さ0.73mである。

現状保存目的の測量調査のため、覆土、出土遺物は未詳であり時期の特定はできないが、岩手県内における経塚の形態、規模などの類例から12世紀頃に属すると考えられる。

発掘調査は未実施のため不明であるが、試掘調査結果から周溝と推定される溝状の窪みを西側、東側で確認している。

葺石は角の取れた礫が大部分を占めており、近隣の滝沢川から搬入した可能性が高い。葺石は移動された形跡がなく、未盗掘である可能性が高い。

経塚SZ2 (図8・11・12・13・14・15・16、写真図版3-1・2、4-2、5-2・5~8、6-1~10-6、12-1~13-2)

JⅢ-c4、JⅢ-b5~e5、JⅣ-a1~e5、KⅣ-a1、JⅣ-a2~e2、KⅢ-a2、JⅣ-a3~e5、KⅣ-a1~a3、JⅣ-c4~e4グリッドに位置する。丘陵の尾根上に位置し、北東辺と南西辺にそれぞれSD1、SD2を伴う。平面形は隅丸方形、林道造成により中央部が概ね北東-南西方向に大きく損壊されているが、断面形は台形と考えられる。規模は下底部で長軸8.89m、短軸(7.46)m、下底部からの高さ(1.42)m、長軸方向はN-57°-Wである。覆土は西側残存部を1a~3a、東側残存部を1b~4bとして、合わせて7層に分層した。いずれもφ30mmまでの礫を含む褐色土を主体とする人為堆積層である。葺石は2,264点819,680gを検出した。

平面形が隅丸方形、断面形が台形(推定)であること、人為堆積層を確認したこと、葺石を検出したこと及び溝を2条伴うことから、経塚であると判断した。主体部は検出されず前述の林道造成時に損壊されたと考えられる。

時期を特定できる遺物は出土していないが、岩手県内における経塚の形態、規模などの類例から、12世紀頃に属すると考えられる。

3a層、4b層の下からは礫層であるⅦ層が検出され、またⅦ層の標高は約97.0mでほぼ水平であること、さらにSD2以北においてもⅢ層上面はほぼ水平であり北に行くほど現地形に沿って下がってゆくことと、SD2がⅢ層上面から掘り込まれていることから考えて、SZ2築造時は尾根の頂部を削平し平坦面を造成した後、経塚を築造した可能性が高い。構築土にはⅦ層に含まれる礫が多数混入していることから、平坦面の造成及びSD1・SD2の掘削土を用いて築造を行ったと思われる。また、SZ2の南東・北西側にも平坦面が存在し、付近に設定したTP2でⅡ層が確認できなかったことから、尾根の斜面を削平し造成を行った可能性が考えられる。しかしながらSZ2の南東・北西面は尾根の斜面にあたり、土層堆積の様相が平坦部と異なる可能性が高いため、断定はできない。

1a層上面で検出した葺石の0.05m~0.1mほどで部分的に整然と敷き詰められた葺石を検出したため、1a層上面の葺石を葺石1層、1a層中の葺石を葺石2層とした。葺石1層と葺石2層の

間にはしまりのある1 a層を挟んでいることから、経塚の修景が行われた可能性が考えられる。裾部においても葺石2層が検出されたが、こちらは経年によりSZ2の上部から流れ落ちたものである可能性が高いと考えられる。

葺石は角の取れた礫が大部分を占め、近隣の滝沢川から搬入した可能性が高い。

溝SD1(図14・15・17、写真図版10-7~11-1・5)

JⅢ-c4~d4、JⅢ-d5~e5、KⅢ-a5、JⅣ-e1、KⅣ-a1グリッドに位置する。JⅢ-c4からKⅢ-a1まで、N-58°-Wで長さ6.94mである。検出面での幅(0.47~0.98)m、深さ(0.50)mで断面形は逆台形である。溝の末端部は円形に収束し、緩やかに立ち上がる。覆土は1~6と6aの合計7層に分層した。すべて自然堆積層である。

SZ2構築土の自然流入に伴う礫を検出したことからSZ2と同時に開口しており、同時期の12世紀頃に属すると考えられる。SZ2の周溝と考えられ、尾根を横断するように位置しておりほぼ直線状である。

溝SD2(図14・15・18、写真図版11-2~4・6)

JⅣ-a3~c3、JⅣ-b4~d6グリッドに位置する。JⅣ-a1からJⅣ-d4まで、N-58°-Wで長さ6.58mである。検出面での幅(0.36~1.23)m、深さ(0.56)mで断面形は逆台形である。溝の一部はJⅣ-a3、b3、b4、c4グリッドで調査区外に及ぶ。溝の末端部は円形に収束し、緩やかに立ち上がる。覆土は1~8まで8層に分層した。すべて自然堆積層である。

SZ2構築土の自然流入に伴う礫を検出したことからSZ2と同時に開口しており、同時期の12世紀頃に属すると考えられる。SZ2の周溝と考えられ、尾根を横断するように位置しておりほぼ直線状である。

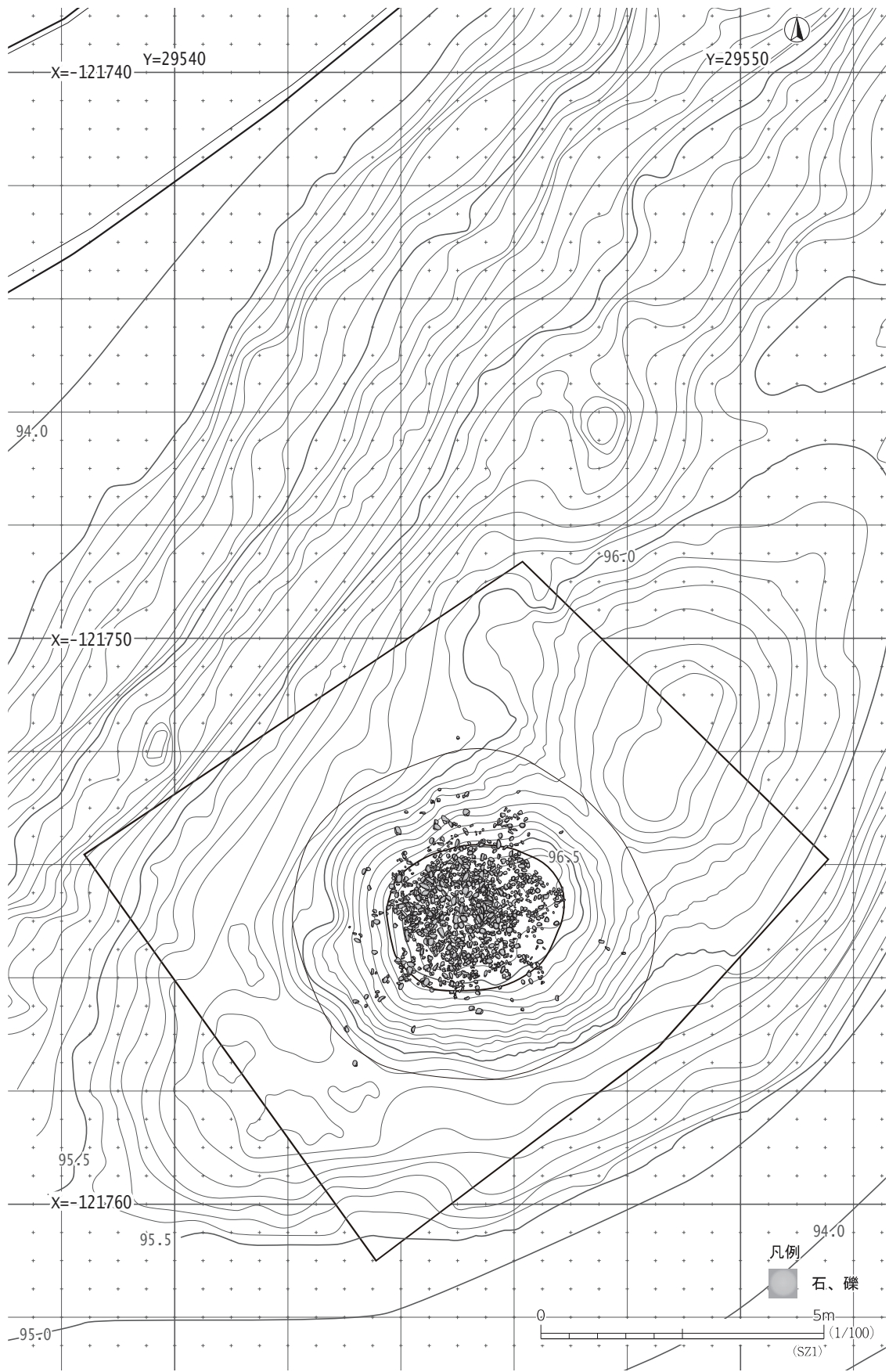


图7 SZ1遺構配置図

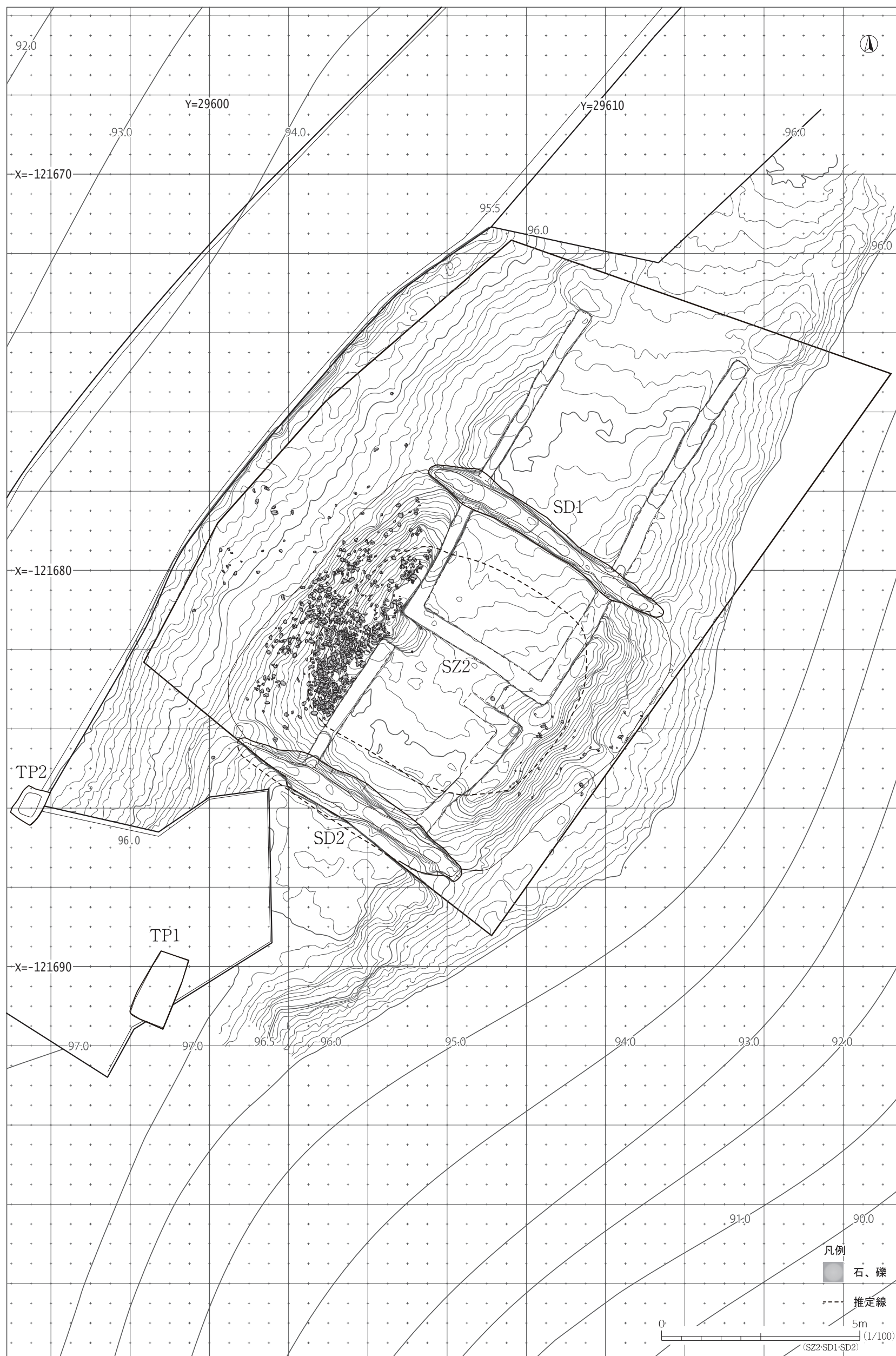


図8 SZ2遺構配置図

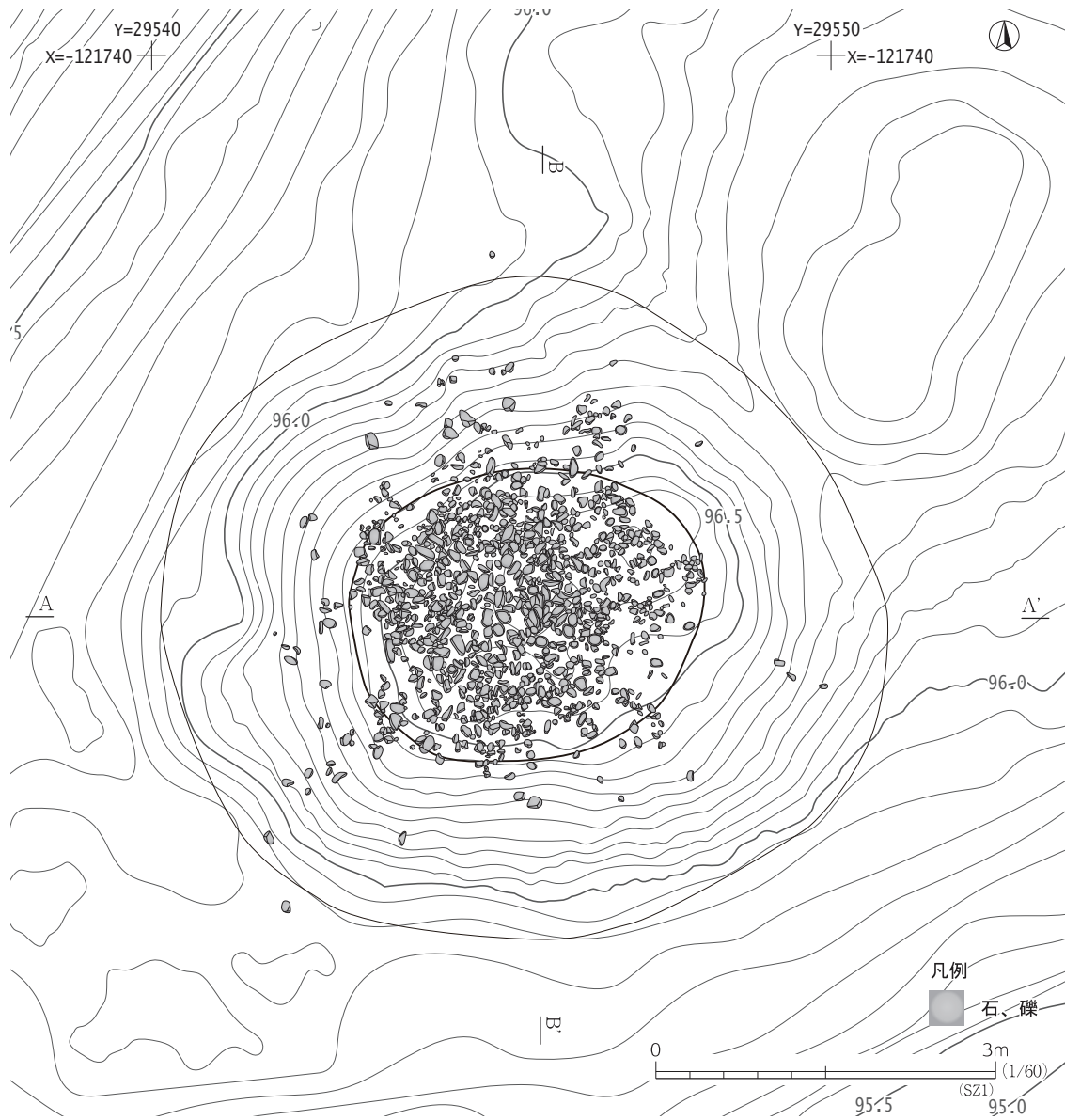


図9 SZ1実測図

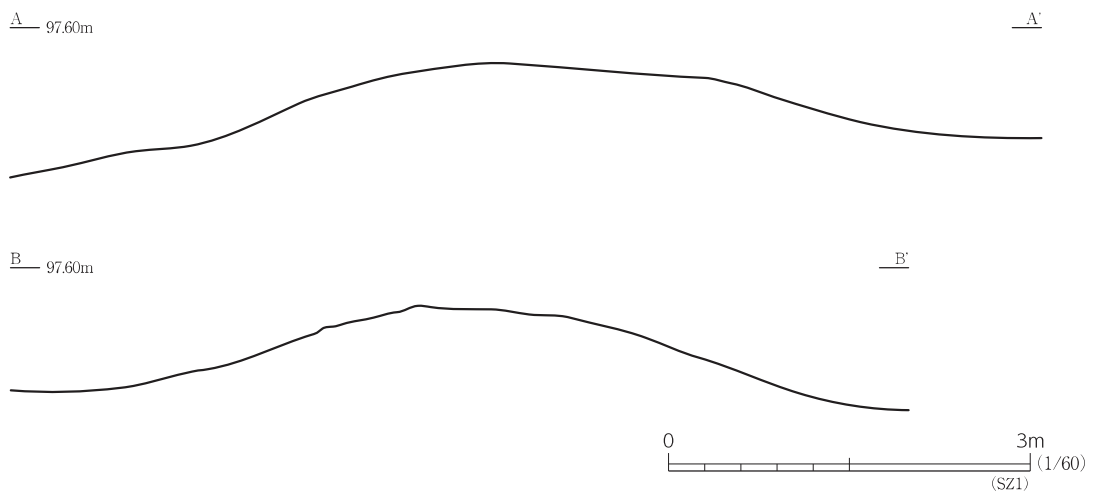


図10 SZ1エレベーション図

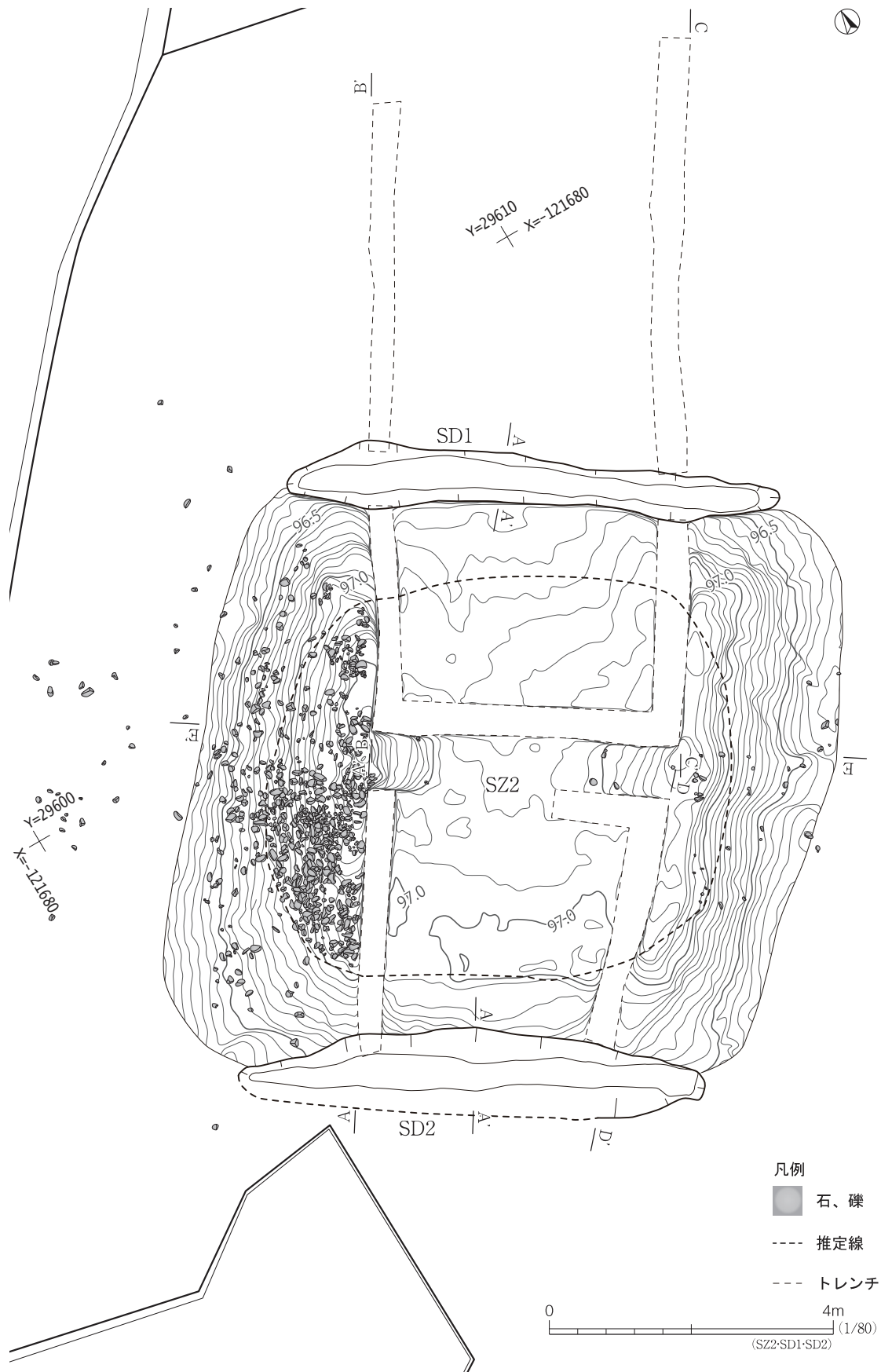


図 11 SZ 2 実測図(葺石 1 層・2 層)



図12 SZ2実測図(葺石2層)

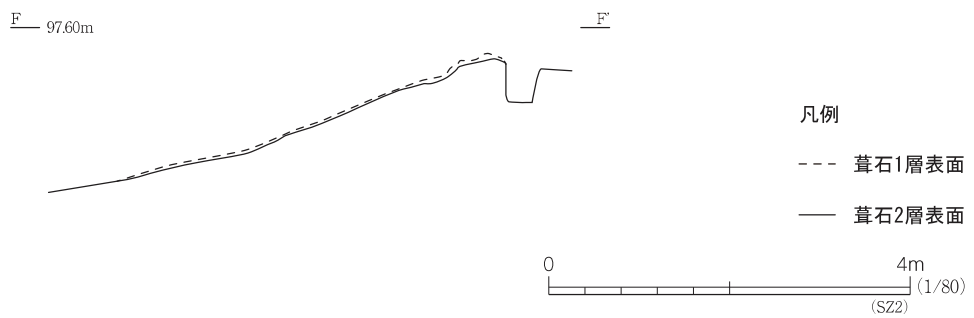
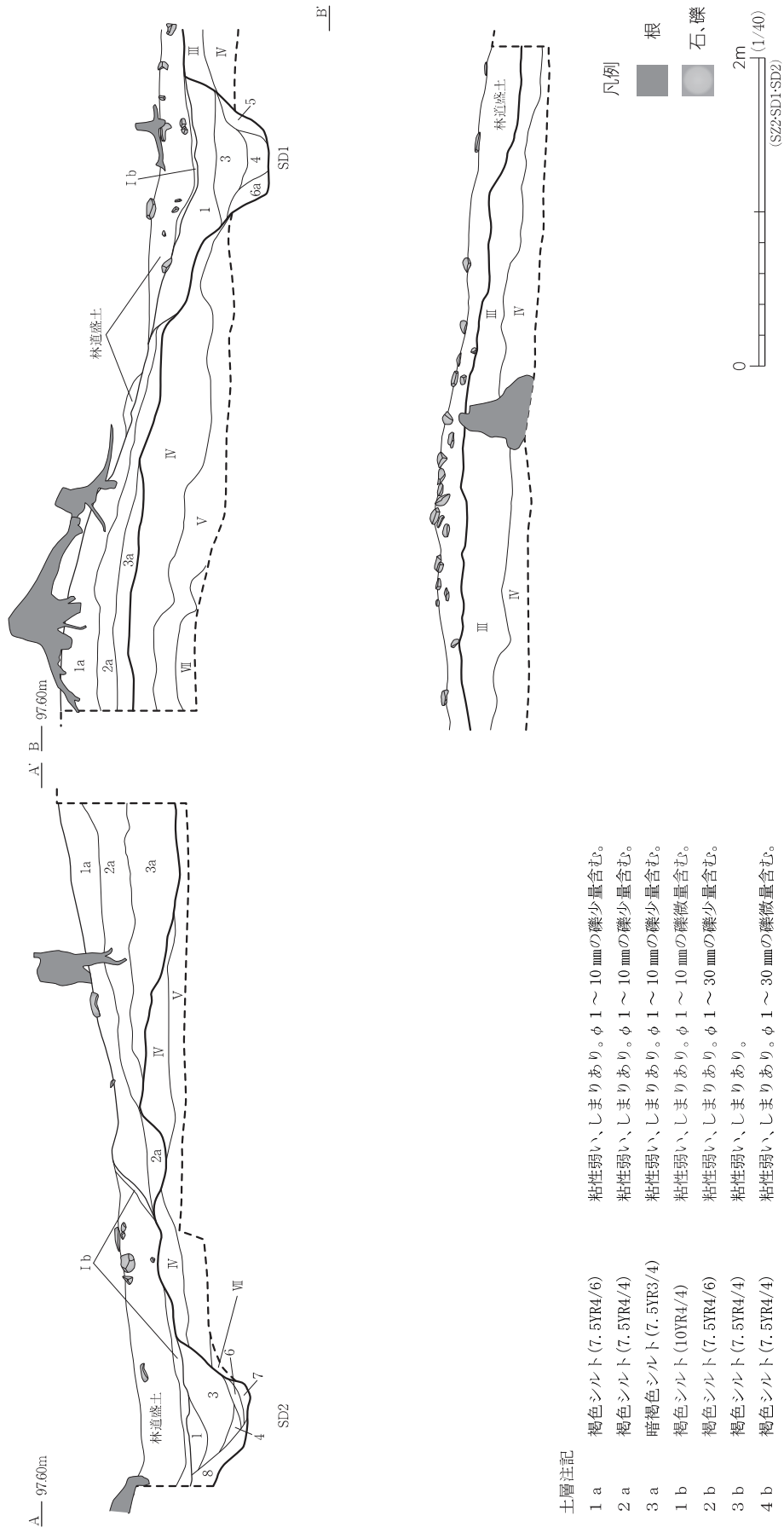


図13 葺石1層・2層断面図



土層注記

- 1 a 褐色シルト(7.5YR4/6) 粘性弱い、しまりあり。φ 1 ~ 10 mmの礫少量含む。
- 2 a 褐色シルト(7.5YR4/4) 粘性弱い、しまりあり。φ 1 ~ 10 mmの礫少量含む。
- 3 a 暗褐色シルト(7.5YR3/4) 粘性弱い、しまりあり。φ 1 ~ 10 mmの礫少量含む。
- 1 b 褐色シルト(10YR4/4) 粘性弱い、しまりあり。φ 1 ~ 10 mmの礫微量含む。
- 2 b 褐色シルト(7.5YR4/6) 粘性弱い、しまりあり。φ 1 ~ 30 mmの礫少量含む。
- 3 b 褐色シルト(7.5YR4/4) 粘性弱い、しまりあり。
- 4 b 褐色シルト(7.5YR4/4) 粘性弱い、しまりあり。φ 1 ~ 30 mmの礫微量含む。

図 14 S Z 2 セクション図(1)

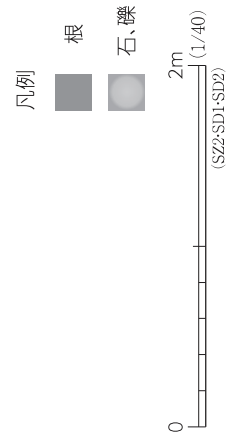
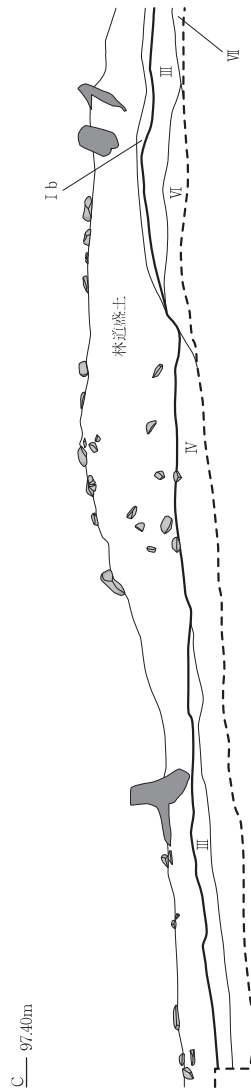
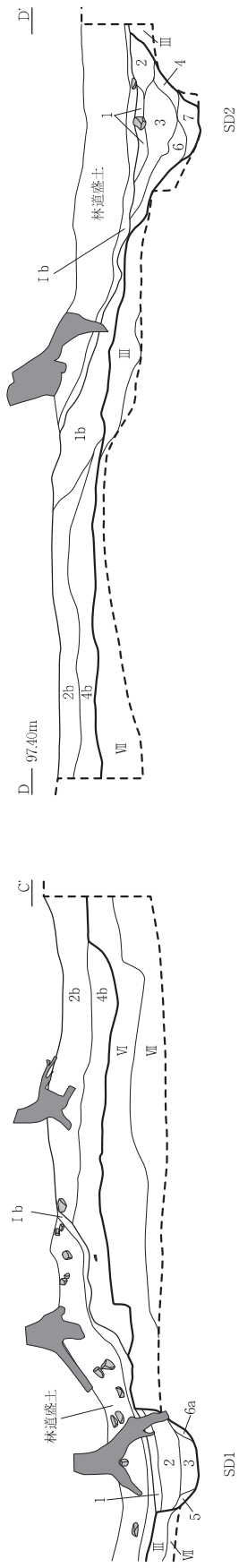


図 15 SZ2 セクション図(2)

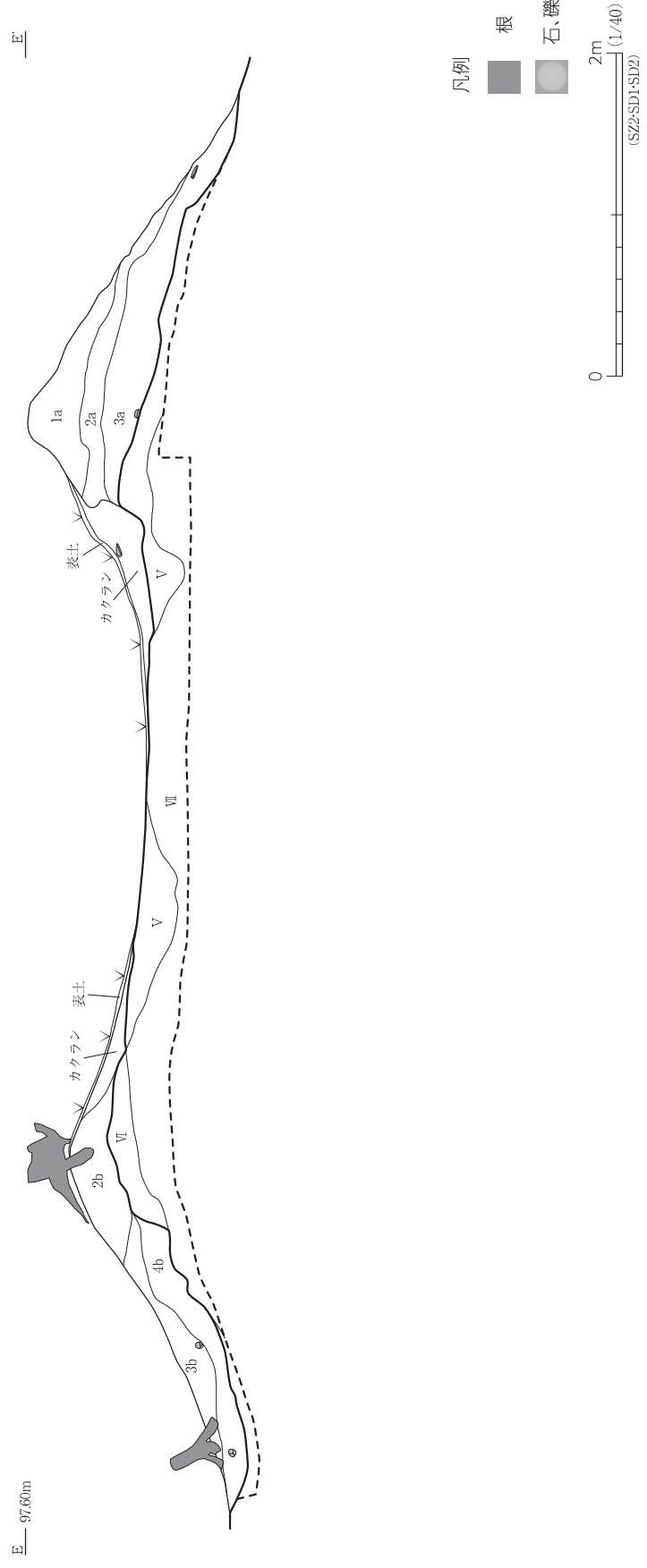
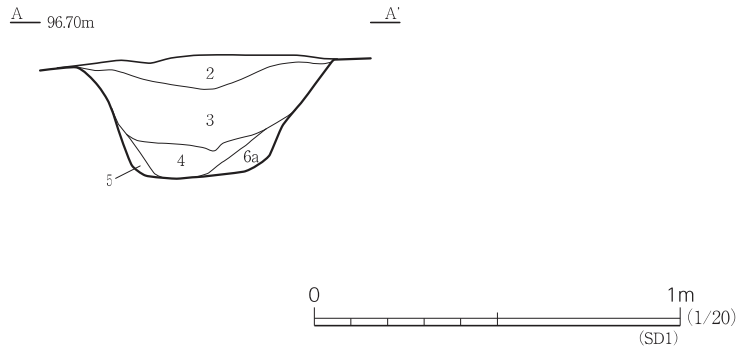


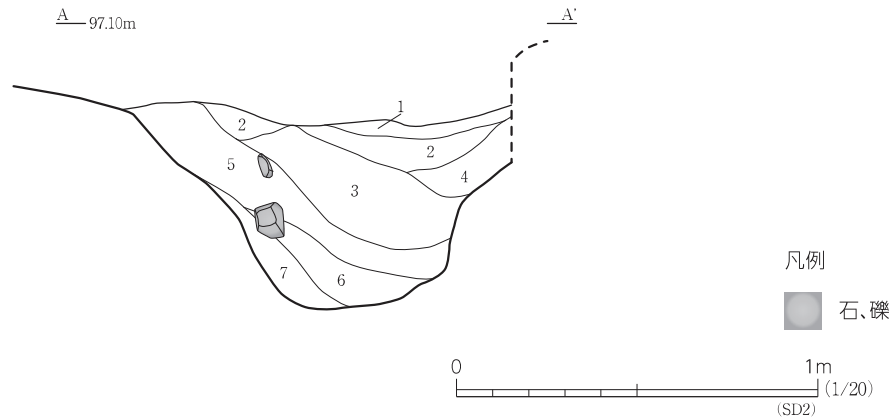
図 16 SZ2セクション図(3)



土層注記

- | | | |
|-----|-------------------|---------------------------------|
| 1 | 暗褐色シルト (10YR3/3) | 粘性弱い、しまり弱い。 |
| 2 | 褐色シルト (10YR4/4) | 粘性弱い、しまりややあり。φ 1 ~ 10 mmの礫微量含む。 |
| 3 | 褐色シルト (7.5YR4/6) | 粘性弱い、しまりややあり。φ 1 ~ 10 mmの礫微量含む。 |
| 4 | 明褐色シルト (7.5YR5/6) | 粘性あり、しまりややあり。φ 1 ~ 20 mmの礫少量含む。 |
| 5 | 褐色シルト (10YR4/6) | 粘性ややあり、しまり弱い。 |
| 6 | 褐色シルト (10YR4/6) | 粘性ややあり、しまり弱い。φ 1 ~ 10 mmの礫少量含む。 |
| 6 a | 明褐色シルト (7.5YR5/6) | 粘性あり、しまりややあり。φ 1 ~ 20 mmの礫微量含む。 |

図 17 SD 1 土層断面図



土層注記

- | | | |
|---|-------------------|-------------------------------|
| 1 | 暗褐色シルト (7.5YR3/4) | 粘性弱い、しまりややあり。 |
| 2 | 褐色シルト (7.5YR4/6) | 粘性強い、しまりあり。 |
| 3 | 褐色シルト (7.5YR4/4) | 粘性ややあり、しまりあり。 |
| 4 | 褐色シルト (10YR4/4) | 粘性あり、しまり弱い。 |
| 5 | 暗褐色シルト (7.5YR3/4) | 粘性ややあり、しまりややあり。 |
| 6 | 褐色シルト (7.5YR4/4) | 粘性ややあり、しまりややあり。 |
| 7 | 明褐色シルト (7.5YR5/6) | 粘性あり、しまり弱い。φ 1 ~ 10 mmの礫微量含む。 |
| 8 | 明褐色シルト (7.5YR5/8) | 粘性あり、しまりあり。粘土質。 |

図 18 SD 2 土層断面図

4 総括

(1) 清水尻経塚SZ1、SZ2について

経塚2基(SZ1、SZ2)を調査した。SZ1は保存目的の測量のみを行ったため、主体部及び遺物の有無は不明である。試掘調査結果から、周溝と推定される溝状の窪みを西側、東側で確認している。また、葺石の状況などから鑑みて盗掘は受けていないと考えられる。SZ2は林道造成の過程で南西から北東方向に大きく損壊されており、主体部はすでに削平されていた。また、北東辺と南西辺にほぼ同じ規模で平行する周溝を伴う。北西辺と南東辺においては、尾根の斜面方向に位置するため周溝が造られなかった可能性が考えられる。SZ1は円形で下底部での直径が6.42m、高さが0.73mで、SZ2は隅丸方形で長軸の直径が8.89m、高さが1.42mである。SZ2は、地山層がある程度平坦に削平されていることから、尾根を平らに削平し、その上に土を盛り上げて築造したと考えられ、裾部においても地山を削平し平坦面を造成した可能性が考えられる。前述のとおりSZ2構築土層下からはⅦ層が、SD1以北からはⅢ層が水平に検出されていることから、SZ2の位置に尾根の頂部が存在したと考えられる。SZ2の築造にあたっては、意図的に尾根上のひときわ高い場所を選び、さらに平坦面を造成することで経塚の規模をより際立たせたと考えられる。いずれも遺物は出土しなかったことから、構築時期については不明とせざるを得ない。

ここでは、SZ1、SZ2の構築時期を考察するにあたって、周辺に位置する経塚などの規模、形状などを参考にして検討を行いたい。

(2) 清水尻経塚周辺の経塚遺跡

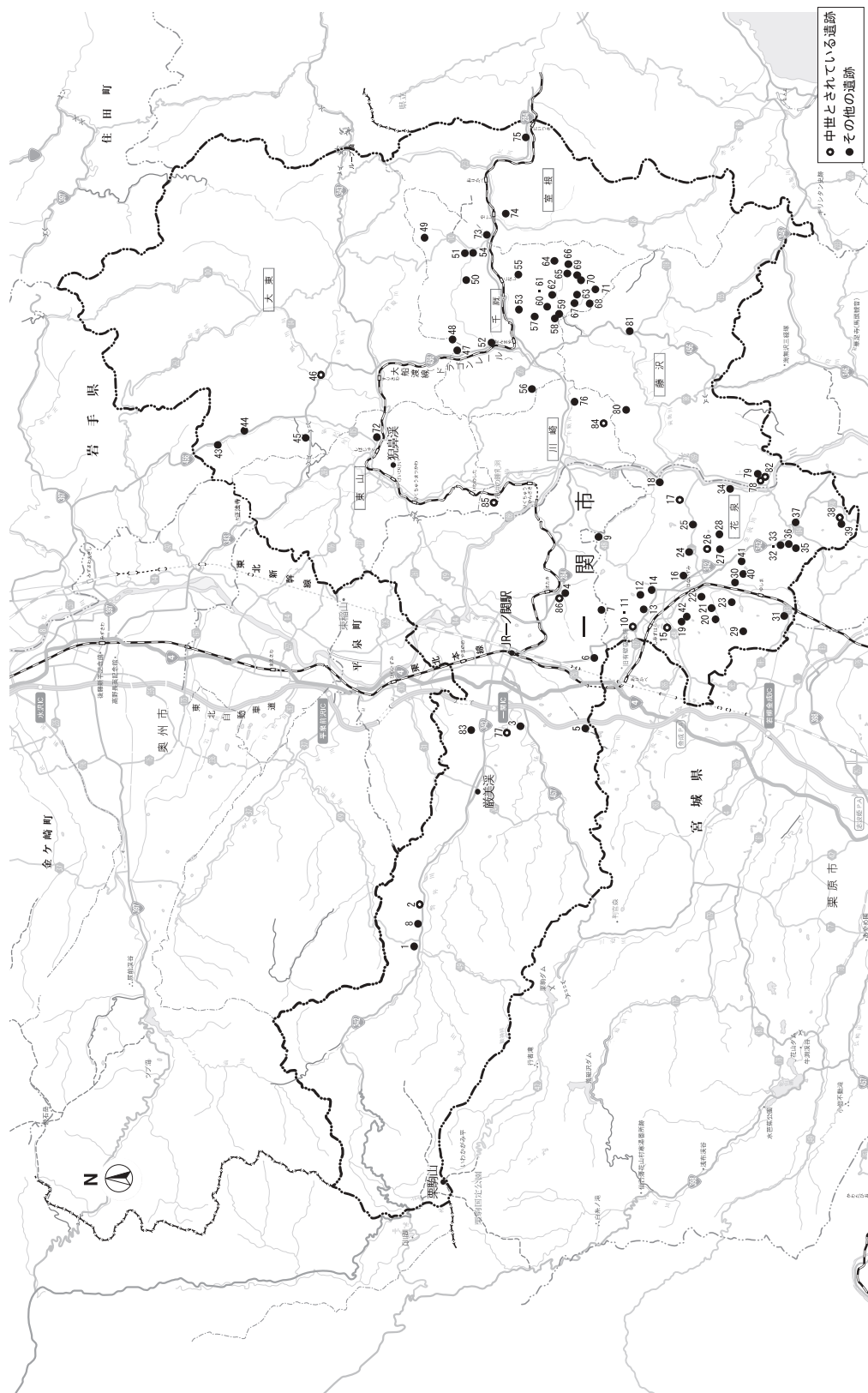
1. 一関市内の経塚遺跡

一関市内において周知の経塚遺跡は86遺跡である(図19、表2)。遺跡台帳及び報告書を参考に経塚の時代区分を行うと平安時代～中世が14遺跡、近世が28遺跡、平安から近世が2遺跡、不明が42遺跡で時期が判明または推定できる遺跡の約7割が近世の遺跡である。その多くは伝承や分布調査によって明らかにされたもので、詳細な調査を実施した遺跡はほとんどないのが現状である。骨寺村荘園遺跡遠西、鹿ノ畑経塚、高倉東ノ森経塚の3遺跡からは常滑焼の壺が出土しているが、骨寺荘園遺跡遠西の例は遺構外からの出土であり、塚との関連性は不明である。鹿ノ畑経塚、高倉東ノ森経塚出土の経壺は一関市指定文化財である。

このうち、石蔵山経塚、骨寺村荘園遺跡の平泉野や慈恵塚などは調査が実施されている。

石蔵山経塚は「塚の時期、性格を示す客観的な事象はないが、石積みで構築されることの多い12世紀奥州藤原氏時代の経塚ないし経塚類似遺構である可能性が高いと考える。尾根筋の端部という構築場所も12世紀の経塚の造営場所のパターンに合致すると考えられる。」(『前平泉文化関連遺跡調査報告書 越戸内経塚発掘調査 弥勒地経塚測量調査 比爪館跡測量調査 その他関連調査研究』岩手県立博物館2016、50頁)とされている。ここで示される「造営場所のパターン」については、SZ2にも適用できると考えられる。

慈恵塚は「…年代、性格等は未詳である。その規模や形状は、陸奥国で12世紀後半に多く築かれた大規模なマウンドと周溝を持つ経塚と共通する(2009 関根)。…塚のある平場も人為的に造成された可能性もあり、これらの構築時期について、今後確認調査を行う必要がある。」(『骨寺村 骨寺村荘園遺跡確認調査総括報告書』一関市教育委員会2017、82-83頁、…は筆者加筆)と述べられている。その規模と形態は「東西約10m、南北約8mの楕円形で、最大比高は約2.2mあり、表面に石が葺かれている。…地表面の観察により塚の周囲には溝とそのさらに外側に



「『青寺村在園遺跡確認調査報告書 白山社及び駒形根神社』岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第34集」に加筆、転載

図 19 一関市内の「塚」遺跡分布図

番号	遺跡名	時代	経塚時代区分	遺跡種別	出土遺構・遺物
1	平泉野	縄文、平安、近世	平安～近世	散布地	竪穴状遺構・塚・溝、縄文土器(中・後期)・石器・土師器・須恵器・磁器
2	慈恵塚	中世、近世、近代	平安～中世	その他の遺跡(塚)	塚、碑・陶磁器・銭貨
3	天王塚		不明	その他の遺跡(塚)	
4	キリシタン塚	近世	近世	その他の遺跡(塚)	塚9基
5	荻又一里塚	近世	近世	その他の遺跡(一里塚)	塚一対
6	蝦夷塚		不明	その他の遺跡(塚)	
7	道士塚	近世	近世	その他の遺跡(塚)	
8	骨寺村荘園	縄文、平安、中世、近世、近代	平安～近世	その他の遺跡(荘園)	竪穴住居・掘立柱建物・柱穴・柱列・土坑・溝・炭窯・礎石状石材・池状遺構・集石遺構・焚火跡・段切り造成・塚・井戸・畑耕作痕、縄文土器・石器・土偶・土師器・須恵器・かわらけ・常滑三筋壺・中国産青磁・陶磁器・銭貨
9	歌塚	近世	近世	その他の遺跡(塚)	塚、石祠
10	地藏崎ノ城(愛宕城)	中世	平安～中世	城館跡	曲輪・土塁・空堀・塚
11	大門沢塚	中世(鎌倉)	平安～中世	その他の遺跡(塚)	塚3基
12	経ヶ森塚		不明	その他の遺跡(経塚)	塚2基
13	尼壇		不明	その他の遺跡(塚)	塚
14	西川塚		不明	その他の遺跡(塚)	塚4基
15	葛西塚	中世(室町)	平安～中世	その他の遺跡(塚)	塚、石塔婆
16	四日市場経塚		不明	その他の遺跡(経塚)	塚
17	鹿ノ畑経塚	平安、中世(鎌倉)	平安～中世	その他の遺跡(経塚)	塚2基、古常滑焼経壺
18	角堂塚		不明	その他の遺跡(塚)	石碑・石祠
19	七ツ森		不明	その他の遺跡(塚)	塚9基
20	赤荻塚		不明	その他の遺跡(塚)	塚1基・堀
21	石食塚		不明	その他の遺跡(塚)	塚2基
22	上油田経塚		不明	その他の遺跡(経塚)	塚1基
23	蒲沢塚		不明	その他の遺跡(経塚)	塚4基
24	一里塚		不明	その他の遺跡(一里塚)	塚2基
25	割山塚		不明	その他の遺跡(塚)	塚1基、石碑
26	王壇	中世(鎌倉～室町)	平安～中世	その他の遺跡(塚)	壇・土坑、石塔婆 36 基・かわらけ・陶磁器・銭貨・人骨
27	衆徒塚		不明	その他の遺跡(塚)	塚
28	金提寺跡		不明	社寺跡	塚2基、石塔婆 23 基
29	大石沢塚		不明	その他の遺跡(塚)	塚2基、塚石
30	退筆塚	近世(江戸末期)	近世	その他の遺跡(塚)	墓石・塚石
31	飛ヶ沢		不明	その他の遺跡(塚)	塚6基
32	一向坊行人塚		不明	その他の遺跡(塚)	石祠
33	一本木行人塚		不明	その他の遺跡(塚)	石祠
34	雲南古塚		不明	その他の遺跡(塚)	塚1基

番号	遺跡名	時代	経塚時代区分	遺跡種別	出土遺構・遺物
35	西狼の沢経塚		不明	その他の遺跡(経塚)	塚1基
36	狼の沢塚		不明	その他の遺跡(経塚)	塚1基、石塔婆
37	七里塚	近世	近世	その他の遺跡(一里塚)	塚1基
38	高倉東ノ森経塚	平安、中世	平安～中世	その他の遺跡(経塚)	塚1基、常滑焼経壺
39	高倉中の森経塚		不明	その他の遺跡(経塚)	塚1基
40	向川塚		不明	その他の遺跡(塚)	塚4基
41	矢ノ目塚		不明	その他の遺跡(塚)	塚1基
42	阿惣沢塚		不明	その他の遺跡(塚)	塚2基
43	峠一里塚	近世	近世	その他の遺跡(一里塚)	塚
44	千人塚	近世	近世	その他の遺跡(塚)	石碑(供養碑)
45	七里塚	近世	近世	その他の遺跡(一里塚)	塚
46	宇堂坂	中世、近世	平安～中世	社寺跡	土壇、塚(修験者の墓) ?
47	千寿塚	近世	近世	その他の遺跡(塚)	塚
48	十三仏塚群	近世?	近世	その他の遺跡(塚)	
49	朝日塚	?	不明	その他の遺跡(塚)	
50	三沢塚群	近世?	近世	その他の遺跡(塚)	
51	行人塚		不明	その他の遺跡(塚)	
52	西中沢塚群	縄文、近世	近世	その他の遺跡(塚)	土坑
53	ユウドウボウ塚	近世?	近世	その他の遺跡(塚)	
54	行人塚		不明	その他の遺跡(塚)	
55	塚		不明	その他の遺跡(塚)	
56	八尾沢塚群		不明	その他の遺跡(経塚?)	
57	岩間一里塚	近世	近世	その他の遺跡(一里塚)	塚、石碑
58	上木六塚群	近世?	近世	その他の遺跡(塚)	
59	塚	?	不明	その他の遺跡(塚)	
60	ジョウカイ塚	?	不明	その他の遺跡(塚)	
61	女ジョウカイ塚		不明	その他の遺跡(塚)	
62	経塚		不明	その他の遺跡(経塚)	
63	鼠沢七里塚	近世	近世	その他の遺跡(一里塚)	塚一対
64	経塚	?	不明	その他の遺跡(経塚)	
65	塚		不明	その他の遺跡(塚)	
66	経塚		不明	その他の遺跡(経塚)	塚
67	池の御前塚		不明	その他の遺跡(塚)	
68	トボウ塚	近世?	近世	その他の遺跡(塚)	
69	塚	近世?	近世	その他の遺跡(塚)	修験の墓?・石碑
70	赤坂塚群	近世?	近世	その他の遺跡(塚)	修験の墓?3基
71	中ノ沢塚群		不明	その他の遺跡(塚)	塚4基
72	五輪塚	近世	近世	その他の遺跡(塚)	五輪塔
73	七日市一里塚	近世	近世	その他の遺跡(一里塚)	

番号	遺跡名	時代	経塚時代区分	遺跡種別	出土遺構・遺物
74	二本木経塚	近世	近世	その他の遺跡(経塚)	
75	中西一里塚	近世	近世	その他の遺跡(一里塚)	塚1基
76	塞の神	縄文、中世、近世	近世	散布地、散布地、その他の遺跡(塚)	塚2基、縄文土器
77	五輪塚	中世	平安～中世	その他の遺跡(塚)	塚1基
78	曲田館(大西館)	中世	平安～中世	城館跡	井戸跡・経塚
79	黄海経塚		不明	その他の遺跡(経塚)	
80	大塚	近世	近世	その他の遺跡(塚)	塚
81	新町塚	近世	近世	その他の遺跡(藩境塚?)	塚
82	曲田経塚	中世(室町時代)	平安～中世	その他の遺跡(経塚)	板碑4基
83	経壇山	近世	近世	その他の遺跡(塚)	塚、石碑・石仏
84	宥海塚	中世	平安～中世	その他の遺跡(塚)	塚
85	石蔵山経塚	平安	平安～中世	その他の遺跡(経塚)	塚
86	清水尻経塚	中世	平安～中世	経塚	

表2 一関市内の「塚」遺跡一覧

高さ約0.6 mの周堤が廻ることを確認した。…調査結果からは12世紀から存在した経塚であったと考えられる。」(『骨寺村 骨寺村荘園遺跡確認調査総括報告書』一関市教育委員会2017、108頁、…は筆者加筆)と報告されている。

上記から塚本体の規模、葺石と周溝の存在、平坦面造成の可能性など、SZ2との共通点が見いだせる。さらに慈恵塚の構築時期が12世紀と考えられることから、同様の規模、形状を持つSZ2の構築時期もまた12世紀頃であると類推することが可能である。

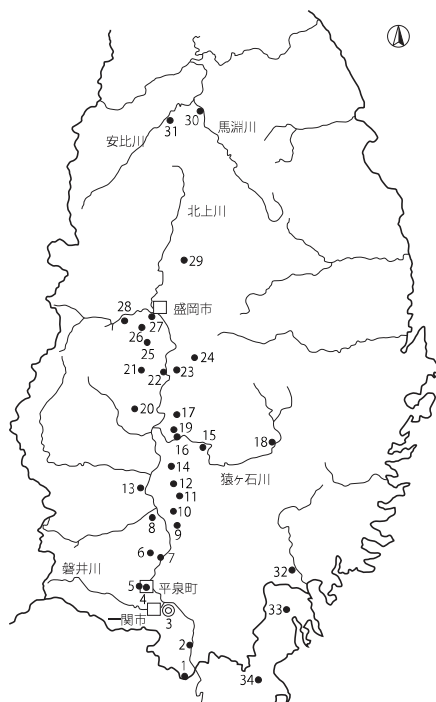
そこで、主に12世紀頃に築造された経塚として報告されている岩手県内の遺跡を抽出し、SZ2とそれらの遺跡の共通点からSZ2の構築時期について検討を進めていきたい。

2. 岩手県内の経塚遺跡

表3は岩手県内(一部宮城県を含む)の経塚及び経塚の可能性のある主な遺跡の一覧、表4はそれらの遺跡の立地一覧、図20は主な遺跡の分布図である。岩手県内では主に32遺跡において経塚の存在が報告されている。

経塚が立地する地形は、山地や丘陵などが大部分を占め、さらに山頂や尾根の頂部や先端など眺望の良い位置に築造されている。また北上川流域において築造される例が大多数である。塚の形状は円形が多いが、南部工業団地遺跡K区、宮代経塚、高松山経塚郡綱森のように方形または隅丸方形の例も見いだせる。これらの経塚は周溝を伴い、南部工業団地遺跡K区では周溝の一部を共有した経塚が6基並ぶ。また宮代経塚では隅丸方形の経塚と円形の経塚が周溝を一部共有して2基並んでいるようである。南部工業団地遺跡K区の二一塚は丘陵の斜面に築造されており、周溝の一部を欠いている。さらに南部工業団地遺跡K区の経塚においても、セクション図から地山を削平した後に経塚を築造した可能性が考えられる(北上市教育委員会1995)。

経塚の規模については、『第50回企画展 岩手の経塚』(岩手県文化振興事業団2000、14頁)において「規模は下底部での直径が5～6m前後で高さは1m未満のものが多い…」と述べられている。これらの経塚の大多数が12世紀後半代に築造されている。



第20図 岩手県内経塚遺跡等分布図

市町村名	番号	遺跡名・出土地	塚等数	形状周溝	主体部	出土遺物	時代・時期	種類
花泉町	1	高倉東ノ森経塚	不明			常滑三筋文壺2	12世紀後半代	経塚
	2	鹿ノ畑経塚	2	円形		常滑二筋文壺1	12世紀後半代	経塚
一関市	3	清水尻経塚	2	円形・隅丸方形・周溝			12世紀後半代か	経塚
平泉町	4	金鶏山経塚	1	円形		渥美袈裟襷文壺1・常滑三筋文壺1・ 常滑甕5 銅製経筒1・平瓦1・土製皿1・鍬残片・ 漆剥落片残片・木材残片・砂金	12世紀前半代～12世紀後半代	経塚
	5	鈴懸けの森経塚	1	円形	有槨式		12世紀か	経塚
前沢町	6	寺ノ上経塚	4	円形		渥美壺1・法華経墨書かわらけ多数	12世紀後半代	経塚
	7	五輪堂	不明			珠洲波状文壺1・常滑三筋文壺または 二筋文壺1	12世紀後半代	経塚
水沢市	8	三子田経塚	不明			常滑三筋文壺1	12世紀後半代	経塚
	9	羽田地区	不明			常滑三筋文壺1	12世紀後半代	経塚か
江刺市	10	伝豊田館跡	不明			白磁四耳壺1	11世紀後半代～12世紀初	経塚か
	11	万松寺経塚	1	円形	有槨式か	渥美壺1	12世紀後半代	経塚
	12	高勝寺跡	不明			石櫃1	銘：長承4年(1135)	経塚か
北上市	13	南部工業団地遺跡K区	7	隅丸方形・周溝	土坑	渥美刻文壺1	12世紀中葉	経塚
	14	新山神社	不明			常滑三筋文壺1	12世紀後半代	経塚か
東和町	15	丹内山神社経塚	2	円形	有槨式	石製経筒1・南唐ノ北宋ノ南宋銭8・ 白磁四耳壺1・湖洲鏡1・北宋銭1	西経塚は12世紀後半代 東経塚は慶元通宝(1195年初鑄)以降	経塚
	16	三熊野神社毘沙門山経塚群北経塚	3	円形		陶製経筒1・銅製経筒1・石櫃1・ 草花蝶鳥鏡1・土製皿1・刀身残片・ 鍬残片	12世紀後半代	経塚
		三熊野神社毘沙門山経塚群南西経塚	1か			常滑三筋文壺1・萩飛鳥鏡1	12世紀後半代	経塚
	17	真行寺経塚	不明			常滑三筋文壺1	12世紀後半代	経塚
遠野市	18	宮代経塚	3	円形・隅丸方形・周溝		渥美壺・中国産青磁碗・かわらけなど	12世紀後半代	経塚
花巻市	19	高松山経塚群綱森	2	方形・周溝		常滑三筋文壺1	12世紀後半代	経塚
		高松山経塚群鉞塚	不明			常滑甕1・渥美片口鉢1	12世紀後半代	経塚
		高松山経塚群経塚	不明			白磁四耳壺1	12世紀後半代	経塚
紫波町	20	小瀬川I遺跡	不明			珠洲波状文壺1	12世紀後半代	経塚か
	21	新山神社境内遺跡	不明			常滑三筋文壺1	12世紀後半代	経塚か
	22	伝比爪館跡	不明			珠洲壺1	12世紀後半代	経塚か
	23	花立地区	不明			常滑三筋文壺1	12世紀後半代	経塚か
矢巾町	24	山屋館経塚	4	円形	有槨式	須恵器系波状文四耳壺1・ 常滑三筋文壺1・箱片1	12世紀前半～中葉・後半代	経塚
						25		

市町村名	番号	遺跡名・出土地	塚等数	形状周溝	主体部	出土遺物	時代・時期	種類
盛岡市	26	湯壺経塚	不明			常滑二筋文壺1	12世紀後半代	経塚
	27	内村地区	不明			常滑甕1	12世紀後半代	経塚か
	28	一本松経塚	不明			渥美?壺1	12世紀	経塚
玉山村	29	玉山館経塚(仮称)	1か2	円形		(壺1)	12世紀か	経塚
一戸町	30	西方寺毘沙門堂経塚	2	円形		須恵器系波状文双耳壺	12世紀後半代～13世紀初か	経塚
浄法寺町	31	土踏まの丘経塚	1	台形		猿投短頸壺1・猿投壺1・ 須恵器系波状文四耳壺1・刀子4	12世紀後半代	経塚
陸前高田市	32	越戸内経塚	不明			渥美壺	12世紀前半代	経塚
気仙沼市	33	両沢遺跡	1		洞穴	常滑三筋文壺	12世紀後半代	経塚
本吉町	34	田東山経塚	11	円形	有櫛式	銅製経筒(底部和鏡)1・経巻断簡・ 常滑三筋文壺4・仏像1	12世紀	経塚

表3 経塚または経塚の可能性のある遺跡一覧(岩手県立博物館編 2000 に一部加筆、転載)

市町村名	遺跡名	地形区分	位置	標高(m)	比高(m)
花泉町	高倉東ノ森経塚	丘陵	頂部	133 ±	123 ±
	鹿ノ畑経塚	丘陵	頂部	50 ±	35 ±
一関市	清水尻経塚	丘陵	尾根上	97 ±	27 ±
平泉町	金鶏山経塚	丘陵	頂部	98 ±	68 ±
	鈴懸けの森経塚	山地	頂部	120 ±	85 ±
前沢町	寺ノ上経塚	河岸段丘中位面	縁辺	76 ±	41 ±
	五輪堂	沖積地	微高地	34 ±	—
水沢市	三子田経塚	河岸段丘低位面	不明	(55 ±)	不明
	羽田地区	不明	不明	不明	不明
江刺市	伝豊田館跡	河岸段丘低位面	不明	(50 ±)	(20 ±)
	万松寺経塚	山地	頂部	130 ±	70 ±
	高勝寺跡	山地	裾部	80 ±	10 未満
北上市	南部工業団地遺跡 K 区	河岸段丘低位面	縁辺	(90 ±)	(38 ±)
	新山神社	丘陵	不明	(210 ±)	(60 ±)
東和町	丹内山神社経塚	丘陵	尾根先端部	(300 ±)	(150 ±)
	三熊野神社毘沙門山経塚群北経塚	丘陵	縁辺頂部	200 ±	100 ±
	三熊野神社毘沙門山経塚群南西経塚	丘陵	縁辺頂部か	不明	不明
	真行寺経塚	河岸段丘低位面	縁辺	120 ±	20 ±
遠野市	宮代経塚	丘陵	尾根先端部	300 ±	30 ±
花巻市	高松山経塚群				
	綱森	丘陵	頂部	213 ±	北上川沖積地 113 ±
	鉞塚	丘陵	頂部	不明	
	経塚	丘陵	頂部	不明	
	小瀬川 I 遺跡	河岸段丘	縁辺	125 ±	10 ±
紫波町	新山神社境内遺跡	山地	山頂	515 ±	山頂 37 ± 下方水田 390 ±
	伝比爪館跡	河岸段丘低位面	下縁辺近く	98 ±	4 ±
	花立地区	河岸段丘・丘陵	不明	不明	
	山屋館経塚	山地	頂部	430 ±	北上川沖積地 335 ±
矢巾町	城内山頂遺跡	残丘伏山地	頂部	328 ±	178 ±
盛岡市	湯壺経塚	山麓扇状地	不明	215 ±	85 ±
	内村地区	河岸段丘低位面	微高地	(128 ±)	—
	一本松経塚	丘陵	端部	280 ±	(100 ±)
玉山村	玉山館経塚(仮称)	山地	尾根先端部	300 ±	50 ±
一戸町	西方寺毘沙門堂経塚	河岸段丘高位面	縁辺	190 ±	50 ±
浄法寺町	土踏まズの丘経塚	山地	端部	252 ±	80 ±
陸前高田市	越戸内経塚	山地	山麓先端部	58 ±	23 ±
気仙沼市	両沢遺跡	丘陵	崖洞穴	35 ±	15 ±
本吉町	田東山経塚	山地	頂部緩斜面	505 ±	南方沖積地 465 ±

表 4 経塚遺跡等立地一覧(岩手県立博物館編 2000 に一部加筆、転載)

(3) 清水尻経塚SZ1、SZ2の構築時期

今回報告した清水尻経塚SZ1、SZ2は北上川流域の丘陵辺縁尾根上に立地している。その規模、形状はSZ1が下底部の直径約6.5m、高さ1m未満の円形、SZ2が直径約9m、高さ約(1.4)mの隅丸方形で、SZ1、SZ2のどちらも周溝を伴う。

これらの立地、規模、形状などは岩手県内で12世紀に築造された経塚遺跡と共通する。また、奥州藤原氏は重要な交通路を維持管理するために経塚を築造したとされている(八重樫2002)。SZ1、SZ2から見下ろす位置には一関市内から気仙沼方面へと延びる街道があり、SZ1、SZ2はまさに交通の要衝に立地していることになる。

以上、岩手県内の経塚を概観し、立地、規模、形態や周溝の有無などを比較した結果、清水尻経塚SZ1、SZ2の構築時期は12世紀、さらに言えば中世の経塚のうち大多数が属する12世紀後半頃であると考えたい。

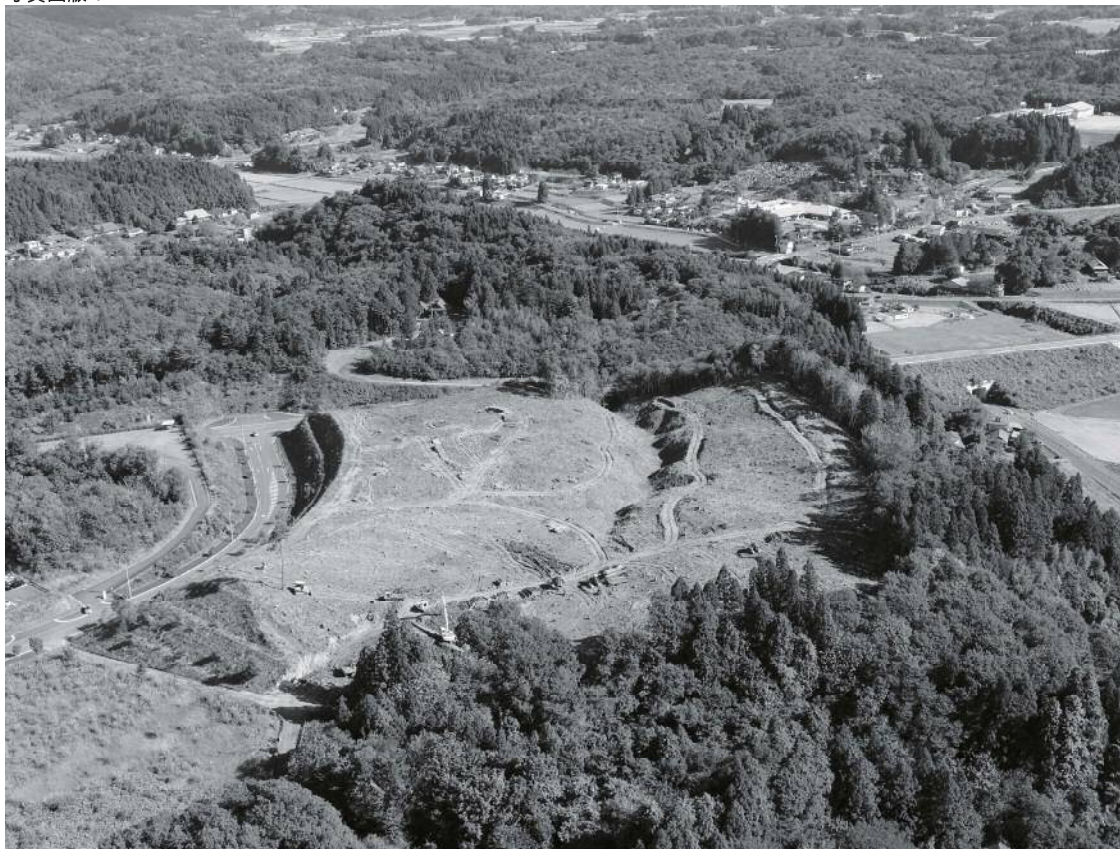
補足 本調査区外に基本層序把握のためTP1、TP2を設定したことは既述のとおりである。

このうちTP1においてIV層の直上に林道造成時の表土であったIb層を確認した。TP1はほぼ尾根上に位置していることから土層堆積の様相が異なる可能性があるが、II～III層の欠如とIV層上面がほぼ水平であることからこの地点においても造成が行われた可能性が考えられる。

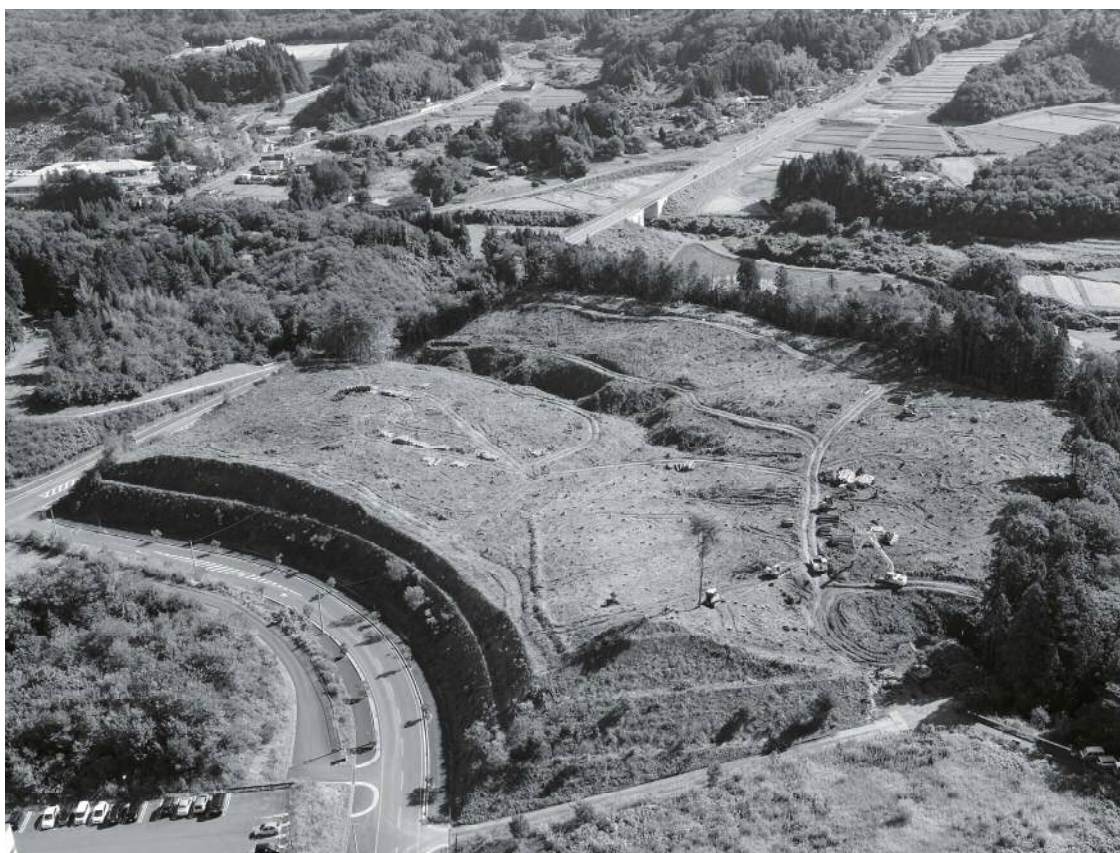
なお、調査区外における所見となるので、補足として報告することとしたい。

【参考引用文献】

- 一関市史編纂委員会 1975 『一関市史』第1巻
- 岩手県教育委員会 1997 『岩手県内遺跡発掘調査報告書』(平成9年度)岩手県文化財調査報告書第103集
- 岩手県教育委員会 1998 『岩手県内遺跡発掘調査報告書』(平成10年度)岩手県文化財調査報告書第105集
- 岩手県教育委員会 1999 『岩手県内遺跡発掘調査報告書』(平成11年度)岩手県文化財調査報告書第108集
- 岩手県立博物館 2016 『前平泉文化関連遺跡調査報告書 越戸内経塚発掘調査 弥勒地経塚測量調査 比爪館跡測量調査その他関連調査研究』岩手県立博物館調査研究報告書第33冊
- 岩手県立博物館編 2000 『第50回企画展 岩手の経塚』
- 鎌田勉・八重樫忠郎 1996 「岩手県内の経塚の検証(1)―山屋館跡経塚状遺構と『経塚』出土といわれる陶磁器について―」『紀要』16
- 鎌田勉・高橋與右衛門 1997 『山屋館経塚・山屋館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第255集
- 楮原京子・田代佑徳ほか 2016 「一関―石越撓曲線の変動地形と地下構造」『地学雑誌』第125巻第2号
- 菅原孝明・二階堂里絵・山川純一 2017 『骨寺村荘園遺跡確認調査総括報告書』岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第22集
- 菅原孝明・畠山篤雄・二階堂里絵 2019 『平成28・30年度一関市内遺跡発掘調査報告書 建長の碑遺跡・猫館遺跡』岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第25集
- 菅原孝明・光井文行・阿部充 2022 『骨寺村荘園遺跡確認調査報告書 白山社及び駒形根神社』岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第34集
- 杉本良 1995 『南部工業団地遺跡II』北上市埋蔵文化財調査報告書第18集
- 関秀夫 1990 『経塚の諸相とその展開』
- 関根達人 2009 「北奥の12世紀 一堂ヶ平経塚の検討―」『平泉文化研究年報』第9号
- 竹内誠・鹿野和彦ほか 2005 『20万分の1地質図幅「一関」』
- 時枝務 1997 「中世宗教考古学の課題」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第8集
- 羽柴直人・八重樫忠郎 2017 『寺ノ上経塚発掘調査報告書 一岩手県奥州市前沢区一』
- 花泉遺跡調査団 1993 『花泉遺跡』
- 村木二郎 2003 「東日本の経塚の地域性」『国立歴史民俗学博物館研究報告』第108集
- 八重樫忠郎 2002 「東北の経塚 一分布傾向からの考察―」『平泉文化研究年報』第2号
- 八重樫忠郎ほか 2018 『白狐塚遺跡発掘調査報告書 一青森県平内町一』
- 立正大学博物館編 2016 『立正大学博物館第10回特別展 経塚の諸相』



1 調査区遠景(南西より)



2 調査区遠景(西より)



1 調査区より栗駒岳を望む(東より)



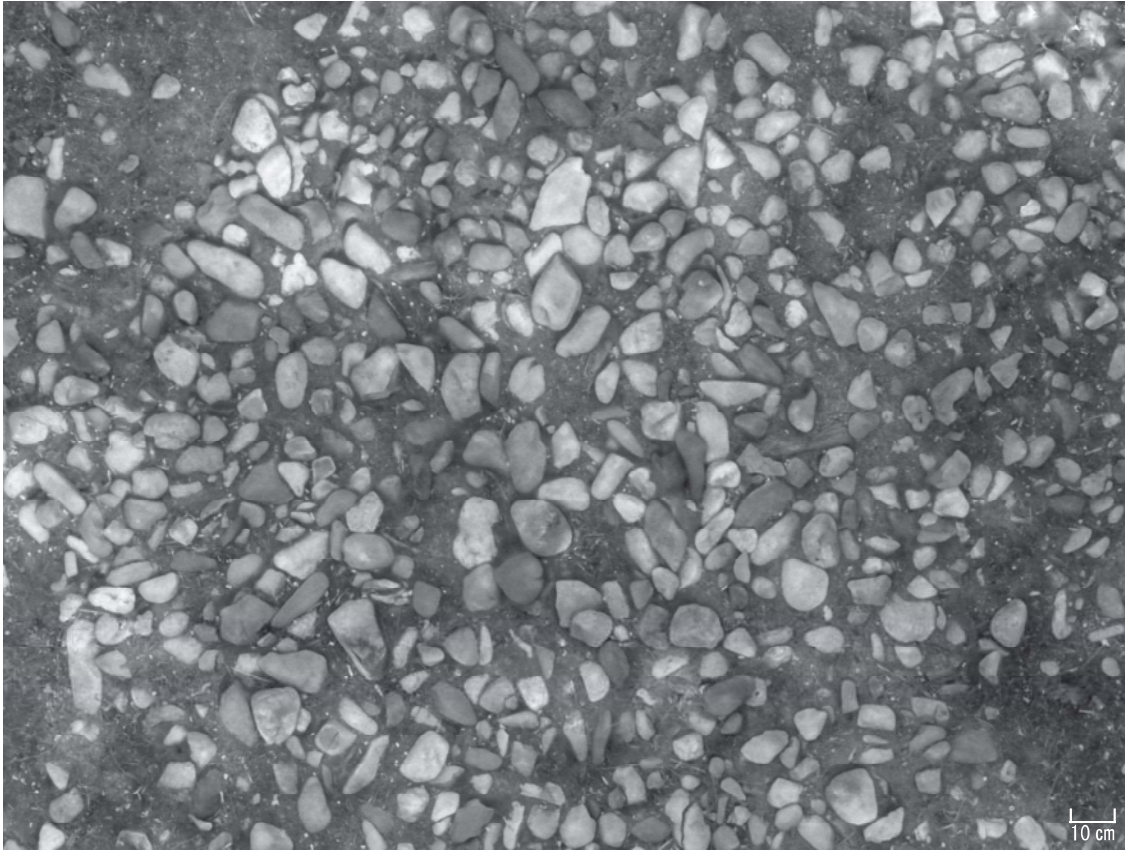
2 調査区遠景(西より)



1 SZ 2 全景(北西より)



2 SZ 2 全景オルソ写真(上が南東)



1 S Z 1 葺石近景オルソ画像(部分・上が北)



2 S Z 2 葺石近景オルソ画像(部分・上が北)



1 『おみだらせ』(東より)



2 SZ1・SZ2遠景(北西より)



3 SZ1調査着手前全景(北西より)



4 SZ1調査終了(北より)



5 SZ2調査着手前(南より)



6 SZ2表土掘削後全景(南西より)



7 SZ2表土掘削後全景(南東より)



8 SZ2表土掘削後全景(北西より)



1 SZ 2 表土掘削後全景(南西より)



2 SZ 2 表土掘削後全景(南より)



3 SZ 2・Aセクション1(南東より)



4 SZ 2・Aセクション2(南東より)



5 SZ 2・Aセクション3(南東より)



6 SZ 2・Aセクション4(南東より)



7 SZ 2・Bセクション1(南東より)



8 SZ 2・Bセクション2(南東より)

写真図版 7



1 SZ 2・B セクション3 (南東より)



2 SZ 2・B セクション4 (南東より)



3 SZ 2・B セクション5 (南東より)



4 SZ 2・B セクション6 (南東より)



5 SZ 2・B セクション7 (南東より)



6 SZ 2・B セクション8 (南東より)



7 SZ 2・C セクション1 (北西より)



8 SZ 2・C セクション2 (北西より)



1 SZ 2・C セクション3(北西より)



2 SZ 2・C セクション4(北西より)



3 SZ 2・C セクション5(北西より)



4 SZ 2・C セクション6(北西より)



5 SZ 2・C セクション7(北西より)



6 SZ 2・C セクション8(北西より)



7 SZ 2・C セクション9(北西より)



8 SZ 2・C セクション10(北西より)



1 SZ2・Cセクション11 (北西より)



2 SZ2・Dセクション1 (北西より)



3 SZ2・Dセクション2 (北西より)



4 SZ2・Dセクション3 (北西より)



5 SZ2・Dセクション4 (北西より)



6 SZ2・Dセクション5 (北西より)



7 SZ2・Eセクション1 (東より)



8 SZ2・Eセクション2 (東より)



1 SZ2・Eセクション3(北東より)



2 SZ2半截完了後全景(北東より)



3 SZ2半截完了後全景(南西より)



4 SZ2半截完了後全景(西より)



5 SZ2 葺石1層(北西より)



6 SZ2 葺石2層(北西より)



7 SD1 東側セクション(北西より)



8 SD1・Aセクション(北西より)



1 SD 1 西側セクション(南東より)



2 SD 2 東側セクション(北西より)



3 SD 2・Aセクション(北西より)



4 SD 2 西側セクション(南東より)



5 SD 1 完掘(北東より)



6 SD 2 完掘(南西より)



7 TP 1・A断面(北西より)



8 TP 2・A断面(北西より)



1 S Z 2 立面オルソ画像(南西より)



2 S Z 2・E断面オルソ画像(北西より)



1 SZ2・A-B断面オルソソ画像(南東より)



2 SZ2・C-D断面オルソソ画像(北西より)

抄 録

ふりがな	しみずじりきょうづかはくつちょうさほうこくしょ							
書名	清水尻経塚発掘調査報告書							
副書名	一関東第二工業団地拡張整備事業に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第35集							
編著者名	菅原孝明・高橋広太・櫛引理沙・赤城佑弥							
編集機関	一関市教育委員会							
所在地	〒021-8503 一関市竹山町7-5 TEL0191-26-0820							
発行年月日	2023年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しみずじりきょうづか 清水尻経塚	いちのせきしたきざわあざしみずじり 一関市滝沢字清水尻 60-1、89-1、90	03209	0E07- 2109	38°54'10"	141°10'25"	20220830 ～ 20221024	304 m ²	保存目的 調査及び 記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
清水尻経塚	その他の遺跡 (経塚)	中世	経塚 溝					
要約	<p>一関市街より、気仙沼市方面へと続く国道284号沿いにある丘陵地上に立地する清水尻経塚で経塚2基、経塚に伴う溝2条を調査した。経塚のうち1基は現状の保存のため測量を行い、残りの1基は記録保存のため調査を行った。いずれの経塚からも時期を特定できる遺物は出土しなかったが、規模や形状から12世紀頃に属する経塚と考えられる。</p> <p>また経塚の築造に際して平坦面を造成していることが判明した。</p>							

岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第35集

清水尻経塚発掘調査報告書

— 一関東第二工業団地拡張整備事業に伴う発掘調査 —

発行年月日 令和5年1月31日

発行 一関市商工労働部工業労政課

〒021-8501

岩手県一関市竹山町7-2

電話 0191-21-8451

編集 一関市教育委員会

〒021-8503

岩手県一関市竹山町7-5

電話 0191-26-0820

印刷 能登印刷株式会社

〒920-0855

石川県金沢市武蔵町7-10

電話 076-233-2550 (代)